

---

# 魔法少女リリカルなのは†閃光の殺し手†

勇往X邁進

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは＋閃光の殺し手＋

### 【Nコード】

N5416X

### 【作者名】

勇往X邁進

### 【あらすじ】

汝、閃光となりて敵を討て――！！平凡な日々を過ごしていた紅月綜夜の友人、櫻木大地はある日、怪物に襲われ、謎の短剣の力を手に入れる！

護りたいモノを護るため、綜夜と大地の戦いは、やがて巨大な悪との戦いへと変わって行く――！！

※以前の「閃光の殺し手」を再編集、新たな形で「閃光の殺し手」を開始します！

## **P r o l o g u e :: 始まりは終わりと共にやってくる (前書き)**

始まり……それは何かの終わり

終わり……それは何かの始まり

全てのものには始まりと終わりがあ

日常にも

非日常にも……

## Prologue：始まりは終わりと共にやってくる

『……………なさい……………さめなさい……………』

誰なんだ…？

『……………目覚めなさい…』

俺を呼ぶのは……………誰なんだ…？

『……………目覚めなさい…輝きに……………そして…護りなさい…閃光の力を以って…』

貴女は……………誰なんだ…？

「……………またか」

少年は上体を起こしやや癖のある黒髪を掻きながらそう呟く。彼は同じ夢をここ最近何度も見ている。

ふと、彼は時計を見る、時刻は7時を14分ほど過ぎた辺りだ

「…やれやれ……………もう少し寝たかったな…」

少年はベッドから立ち上がり着替え始める。

彼は……櫻木 大地は、この日、いつも通り、当たることのない予感が心を過ぎる

今日は何だか、自分の転機が来る……と……

皮肉にも当たることのない予感が良い意味で……あるいは悪い意味で的中するとは……まだ、誰も知らない……

大地は自身の通う「私立聖詳大付属高校」の制服をいつも通り着崩し、ローラーブレードを取り付けた靴で校門にたどり着く。

「さて急いで行くk「おおおい、だあいちいゝ!!」お?」

と、彼の背後から聞き慣れた声が遠くから聞こえる

ザザザザザアアア!!!

と土埃を巻き上げながらマウンテンバイク型の自転車をドリフトしつつ停車し、大地の目の前にゴーグルを掛け、ブロンドの髪を靡かせ自転車に跨がったままの少年がいる。

「おお、綜夜、相変わらずの重役出勤だな」

「相変わらずって何さ、相変わらずって」

彼の名は紅月綜夜、ロシア人と日本人のハーフで大地の中学時代からの友人である。ゴーグルの下からはロシア人特有の碧眼が見えて

いる。

ルックスは本人曰わく『良い方』で、身長体重共にやや高め、ちなみに体つきもまあ良い。

好きな教科は体育と自習、苦手な教科はそれ以外全部で、特技は大地と同じく幼い頃両親からしこたま訓練させられた護身術とのこと。実際に綜夜と大地の組み手では五分五分の割合で勝ち負けしている。綜夜の両親は既に他界しており、現在は親戚と行政からの援助を受けてアパートに一人暮らし、ちなみに大地の住む家は綜夜の住むアパートのお隣りである。

「っと大地、時間は?!」

「まだ間に合う、自転車置いて来いよ」

「いよおッし、わかった!」

大地と綜夜を避けるようにまだ余裕で登校している周囲の小等部の少年少女の好奇の視線が刺さるが、大地と綜夜はそんな事を気にするほど肝の小さい男では無い。すかさず綜夜は自転車を置きに向かい、そしてすぐさま戻ってきた。

「ごくろうさん」

「いやいやそれ程d「綜夜さん!」んお?」

そんな綜夜と大地の背中から、少女の声がした。

「お!喫茶翠屋の看板娘なのはちゃんにそのご友人のお嬢ちゃん達じゃないか!おはよう!」

「皆、おはよう」

仲の良い綜夜の妹分達であり大地の仲の良い後輩達がそこにいた。

「綜夜さん、櫻木先輩、おはようなの！綜夜さんは今日も丘に行ってきたの？」

亜麻色の二つ結びに空色の目、喫茶翠屋の看板娘にして、高町家の末娘の高町なのは

「おはよう、今日は少し遅いんだね」

金髪のツインテールに赤い瞳、なのはの親友にして外国人らしい、フェイト・T・ハラウオン

「あんちゃんは相変わらず騒がしいなあ、櫻木先輩の身にもなりいや」

栗色の短髪に蒼い瞳、エセ気味な関西弁が特徴的な八神はやて。

「もうちょっと安全運転しなさいよ、危なっかしいたらありゃないんだから」

金髪で緑色の目、綜夜曰わく『ツンとデレの化合物』らしいアリサ・バニングス

「おはようございます、綜夜さん、櫻木先輩」

青い髪に薄紫の目、ちよっとミステリアス？いやいやただ大人しいだけの月村すずか。

この5人は、綜夜がなのはの両親が経営する喫茶店、翠屋に良く通う縁で仲良くなった。

たまに勉強を教える事もあるほどだ、彼女達が綜夜に、だが。

「そーいやあんちゃん、今日はえらくおそく」悪い！話をしたいのは山々なんだが、俺は急がねばならんだ！また翠屋でゆっくり話

そうじゃないか！じゃっ！！」

ダダダダ……………

と、綜夜は唐突に走り去った。

「……………行ってもうた」

「あいつたしか日直だからな」

「「「「「あああ……………」」」」」

はやての呆氣に取られた一言に返答する大地の言葉に皆、納得してしまった

余談だが、この後、綜夜が階段でずっこけ、大地に先を越されて遅刻してしまったのを、少女達は知らない。

キンコンカンコンコン。

時間は一気に跳んで放課後のこと

綜夜は愛用の赤いマウンテンバイクに乗りながら、大地はローラーブレードを付けた靴で翠屋に向かっていた。

「痛い……………まさか一番上の段でけつまずくとは予想できなかった……………」

「ざまあないな」



「なんだとおう!？」

朝のダメージがまだ響いているらしく、そこかしこに湿布が張られ、間抜けさと痛々しさが同居している。大地はそんな友人の痛々しげな様子を半ば呆れながら見ていた。

ふと、二人は空を見上げる。

まだ日が暮れるのには早いのか、空はまだ青い、そう、不自然なほどに。

「……………ん？ 大地、白昼の残月にしては大分月が明るいよな？」

「ああ……………気味悪いな」

大地と綜夜が空を見上げると、そこには蒼い青い輝きを放つ月がやけにぬらりとした光を放っていた。

二人が不思議そうにその月を見上げていた、その時である

ビリビリビリ……………!!

地鳴りのような、雷鳴のような、激しい音と共に、空が裂けたのだ。

「な……………」

「あ……………あ……………」

突然の出来事に、大地と綜夜は愕然とする。

ただただ見上げていた空が、ぱっくりと裂けたのだ、生きていてこんな摩訶不思議な出来事に遭うのは二人とも初めてである。

地鳴りはまだ続いたまま、空の裂け目から、何かが二人の目の前に落ちてくる。

ズドン!!

「うわっ!!」

「おおっ! あだっ!？」

恐ろしく重かったのだろうか、落ちて来た“ソレ”は凄まじい音と共に、地面にクレーターを作った。

振動にバランスを崩して倒れる綜夜。綜夜の隣でバランスを崩し、尻餅をつく大地。

「な……………なんなんだ……………なんなんだコイツはツツツ!？」

目の前にいる「異形」に、二人はただ驚愕した。

日常の終わりは非日常の始まりと共にやってきた……………

## 戦う力・殺し手の始まり

「な……………なんなんだ……………なんなんだコイツはツツツ!？」

目の前に現れた“異形”に対して、綜夜が誰に問い掛けるでも無い疑問の叫ぶ。

恐竜のような体に3メートルはあろう巨体、黒やら黄色やら、とにかく警告色で彩れたその“異形”は、どこかの出来の悪い特撮で出てきそうな、とにかく悪趣味な怪物だった。

その怪物がギロリと二人の方を向く。

「三十六計逃げるにしかり!! 戦略的撤退だ!! 逃げろ逃げろオオオ!!」

「りよおかいいいいいい!!」

すくみ上がっている場合ではない!

と二人は体中の筋肉に電気信号を送り、すぐさま立ち上がると、綜夜はマウンテンバイクにまたがって、全速力で漕ぎ出し、大地は走り始めた。

『VOOOOOOOO!!!!!!』

後ろから怪物の咆哮が聞こえる。

それだけで空気が震えるのが分かる、綜夜と大地は戦慄した。

「くっそ!! 何がなんだか分からねえ!! とにかく死んでたまるかってんだ! 急ぐぞ大地!」

「分かってる!!」

何かなんだか分からんとは言ったが、怪物が自分を好意的な目で見てくれないのは見れば分かるし、圧倒的な死を持つてくる存在だというのも、第六感で分かっている。

こういう時、そう、圧倒的な敵性体が自分の目の前に現れた時どうするか？

立ち向かう？ 策を練る？ いやいや、綜夜はこういう時、最も有効な手段というものを両親から教え込まれ、大地もそれを教えてもらっていた。

それは“逃げる”事らしい。

逃げ切り、生きてさえいればチャンスはまた来る、しかし死んでしまえばそこで全てが終わり

ゲームオーバーだ。

ゆえに綜夜は“逃げる”。

ゆえに大地は“走る”。

マウンテンバイクを全力でこぎながら、逃げる。

ローラーブレード付きの靴で地を蹴りながら、走る。

しかし、それでも…だとしても

『VVVOOOOOOOO!!!!!!!!!!』

「うおおおっ!?!」

「早ええええ!?!?!」

全く逃げ切れていない。

（（相手がデカすぎる!!））

マウンテンバイクを幾ら全速力でこぎ、ローラースケートの靴で走り、下手な自動車より早く動いても、普通より幾段か上の速度で走っても

怪物はすぐさまそれに追いついて来る。

「ぐううっ！」

「くっ、そおっ!!」

綜夜と大地が次第に疲弊し、苦虫を噛み潰したような表情になった、その瞬間である。

ドガガッ!!

「……は……？」

「…え……？」

綜夜は自分がマウンテンバイクから転げ落ちて、地面に転がって行くのを感じた。

大地はその様子を目の当たりにする。

綜夜は下腹部にある違和感の元を感じて見ると、自分の腹から、太い棘のような物が生えているではないか。

「がふっ!?! げええっ!!」

急に気持ち悪さと痛みが込み上げ、綜夜は血反吐を吐いた。

「そ、綜夜ああ!!」

友人の無残な姿を前に大地はただ叫ぶことしか出来なかった。

「ぐっ、だい、ち、先に逃げろ：がはっ！」

綜夜は痛みを堪えながら友に逃げるよう指示するが痛みと無茶で更に血反吐を吐く。

「んなもんできn「いいから！早く行け！」っ!!」

「明日：また、校門：でな」

俗に言う「死亡フラグ」の言葉を言いながら綜夜はニヤリと笑ってみせた。

「っ!：くそっ！」

「あ、やっぱ行くのかよ!？」

ホントに置いていかれたことにショックを受けた綜夜の言葉を聴いてほんの少し安心しつつ、大地は走り続ける。

どれだけ走ったのか、大地は小さな公園にいた。

（綜夜：あんなフラグ建てるようなこと言ってたけど：頼むから：無事でいてくれ：）

大地はそう願いながら歩いていた時だ。

ビリビリビリッ…!

「っ…!まさか…!」

大地はあの感覚を再度感じ、大地は空を見上げる。  
そこには先と同じように空が裂けていた。

(また…来るっ…!)

そして、空の裂け目から先程と同じような異形は姿を現した。そして異形の目はしっかりと大地を見据えている…

「くそっ…!何だよ…!何なんだよコイツらは…!」

『VVVOOOOOO…!!…!!…!!』

異形は叫ぶ、まるで獲物を捕まえ、歓喜の叫びをあげるように…。

「っ…!!…!あ…!あ…!」

その叫びを受けた大地は金縛りにあったかのように怯み、異形を前にただ立ち尽くしていた。異形は立ち尽くす大地を見据え、握った拳を振り上げた。

「あ、ああ、ああああ…!」

(逃げろ…逃げろ…逃げろ…!逃げろ!逃げろんだ…!)

大地はとにかく逃げることを考えるが、恐怖に強張った身体は動くことが出来ない。

しかし異形の握りしめた拳は、大地に届くことは無く……

グシヤツ！

という何かが潰れた音と共に、粉碎された。

V  
V  
V  
g  
a  
a  
a  
a  
a  
a  
a  
!

異形は止血するように腕を掴み痛みにもがくような叫びをあげる様子を見た大地は、何が起きたのかわからないという表情である。

「な…何が」

そう考えてると目の前に光り輝く何かが現れた

「短劍……？」

そう、目の前には真つ白な短剣が『浮いていた』……本来起きるはずのない事が度重なる状況に、大地はただ眼を見開くことしか出来なかった。

すると…

『力を欲しますか？』

と、いきなり短剣から女声が聞こえ始めた。

「うおおお?！」

大地は声にびびり、ズザザッ！！と後退りをしてしまう。

『力を欲しますか？護る力を…救う力を…戦う力を…欲しますか？』

女声は静かに、機械的にだが、大地の心に語りかけるように話す。

「…………その力があれば、俺は…綜夜を、皆を…助けられるのか？」



彼は問う、護る力を、戦う力を得たいために

『護るためにそれ相応の覚悟が必要です…貴方にその覚悟はありますか？』

「……わかんねえ…でも、俺は誰かを護るためなら、俺は、どんな覚悟でも持ってやる。」

『その覚悟があるなら、我が刃を貴方の心臓に…刺し貫きなさい』  
「っ……、……………」

大地は一瞬目を見開くが宙に浮かぶ短剣を手取る。その時、大地の表情に一瞬、恐怖がよぎる。

もし自分が死んでしまったら…もし自分が得た力で友を傷つけてしまふのなら

「でも、もう…決めたんだ……俺は、どんな力でも、友を…皆を、俺に関わるすべての人を…護るって、決めたんだ!!」

そして大地は、短剣を心臓に突き刺した。

その瞬間、大地の視界は白と黒に染めあげられた。

——アレとは別の反応が？

——はい。おそらくは“閃光の殺し手”かと…

——閃光の…くく…面白い、“アレ”との接触が行われ次第、解析対象として。

——捕獲はしないのですか？

——ああ、泳がせろ。“アレ”との同時解析が出来れば儲けものだ。死んだときに迅速に回収すれば良いだけだ。“アレ”と同様、“闇の書”でもなんでも使ってな…くく…

——は、了解しました。

——さあ、“人ならざりし者”へと進むが良い、“閃光の殺し手”

## 人物・櫻木大地

名前…櫻木大地 さくらぎ だいち

年齢…16歳

魔力量…S+

ランク…SS++

魔力色…断罪の白、殺戮の黒

術式…超古代式

身長…175cm

体重…60.5kg

本作の主人公でやや癖のある黒髪とやや鋭い目が特徴的

どこにでもいる普通な高校生だったが、突如として現れた異形と戦うため、突如として現れた『閃光の短剣』の導きにより心臓を刺し貫き、『閃光の殺し手』として覚醒する。

両親は海外で仕事をしているため自然と家事全般が得意になった。

特技は料理と、父から教わった混成格闘技

趣味はのんびりすること。

私立聖祥大付属高校に在学している。苦手科目は数学のみで得意科目は数学以外

同年代以外（下は10歳から上は30代まで）によく好意を寄せられるという特異（？）体質の持ち主でもあるが、本人はただ「年上と年下に受けが良いらしい」としか感じていない。

（ちなみに本人は優しく髪の毛の長い女性が好きらしい）  
使用デバイスは短剣型デバイス、エグゼキュート

「デバイス」

名前…エグゼキュート

形式…イレギュラーデバイス

『閃光の短剣』が大地の心臓の血に濡れ、デバイスとなった物。待機時は剣を模した天秤が彫り込まれた黒いストーンカメオのペンダントになる。

『ノーマル』

通常形態にして基本形。

短剣の剣身からは白い光刃が現れ、擬似的に長剣の役割も果たす

『ドライブ』

魔力の奔流を作り敵を数秒間、拘束することが可能。その後はスペックが1.5倍に上がる

『フルドライブ』

現在は不明

〔ロストログア〕

名前…閃光の短剣

種別…融合型

『懺血の牙』が見つかった古代遺跡から発掘された融合型ロストログア。

見た目は、古い短剣みたいだが、それを一度心臓に突き刺すと『閃光の殺し手』として任を果たすべく、『懺血の守護神』と共に戦う歪められた因果を背負うことになる。

内包されている魔力は『懺血の牙』の半分程度だが、それを補う戦闘知識を得る。

また、これは融合する事でしか扱うことが出来ず、過去何千、何万人という閃光の殺し手達の記憶を受け継がなければならず、それにより今まで戦闘経験のない者も否応無く、百戦錬磨の経験を持った

最強の戦士の系譜の一角となり、『断罪<sup>ひかり</sup>』と『殺戮<sup>やみ</sup>』の二面の力を  
持つこととなる。

しかし高潔な魂と仲間を思う心を持たない者は、その恩恵を受ける  
どころか、心臓を突き刺したことにより死ぬ。

人格はあるが基本的には現れない。

歴代の殺し手の意識を蓄積する自動能力があり、時たま時間と空間  
に微弱に干渉する結界を『館』の形で作り上げ、現役の殺し手と歴  
代の殺し手を対話させるが、その意図は不明。ザルディ・ハッサや  
アリスは経験からして、これを「悪い予兆」「嫌な予感」と考えて  
いる。

## 接触・餓血の守護神（前書き）

さあさあ、始まるよ！殺し手の覚醒、そして守護神との邂逅が！！

## 接触・饑血の守護神

——長い事、草原に佇んでいた。

茜色の空、血に塗れた草、そして幾十、幾百の血に塗れ鈍色に輝く鎧を着込んだ騎士達の死体が転がっている。

その無骨な騎士達の死体の山の中に、一人だけ……ただ一人だけ、華奢な軽量型の鎧を着た騎士がいた……

その騎士の兜を外し、中を見ると、それは女性だった……見覚えがある……女性……

その女性は、『俺』が、愛した——。

「うあああつ!!」

大地は声をあげながら勢いよく眼を覚まし、体を起き上がらせた。

そこは自分の毎日眠るシングルベッド、勉強用の机と椅子、教科書や漫画を入れてる本棚、好きなゲームのポスター、某ゲル状水色生命体のぬいぐるみ、全てが自分の家の自分の部屋にあるものだと言断した。

「なんで……俺……っ!」

大地は自分が何故自宅にいるのか見当も付かなかった。そして昨日の出来事がフラッシュバックしてきた

異形に襲われ、自分を逃がした綜夜

辛くも逃げた先に現れた新たな異形

異形から助けた謎の短剣……そして

その短剣を心臓に突き刺した自分

ハッと大地は自分の胸部を見るべく服をはだけさせた。

が、そこには傷もなく、ただあるのは黒いストーンカメオに剣の天秤が堀こまれたペンダントだった。

「これ……は……」

大地は記憶を辿ってみるもこのようなアクセは持ち合わせていなかった。が、このペンダントからは何故か懐かしさを感じ、あまり深く思案せずに時計を見る。針は8時を5分ほど過ぎたところである。

「やっべ遅刻だ！」

大地はすぐさま着替え始め、朝食も食べずに登校した。勿論、遅刻だったのだが、昼休みになるまでに4回ほど腹の虫が鳴ったのはまた別の話である。

その後、大地は綜夜とも昨日の話をしたのだが、綜夜には傷跡もなく、学校では化け物が現れた噂も無し、空が裂けたという噂も無し、ただ互いに見知らぬアクセを持ち合わせているだけ、しかも気に留めても仕方ないような物だったため、昨日の事件は白昼夢だった、ということを決着がついてしまった。



そして時は過ぎ、放課後

大地は窓際にもたれながらカメオのペンダントを見つめて考えを巡らせていた。

「……悩み事…？」

ふと、近くから聞きなれた小さな声が訪ねてきた。大地が視線を動かすとすぐそばに灰色の長い髪、赤銅色の双眸には黒縁の眼鏡を掛け、肌の色は健康的な褐色、そして全体的に華奢な体の少女が立っていた。

彼女の名は『ことざかり寿祝』、一年生であり、綜夜と大地の後輩兼友人にあたる。

「ああ、祝ちゃん……まあ悩み事っちゃあ悩み事かな…？祝ちゃんは…？」

「……今から部活…」

素っ気も何もない無感情な言葉を口にする祝は、綜夜と同じように、両親を亡くし、一人で暮らしている。

それが影響しているのかどうかは分からないが、彼女はとても無口・無表情である。

親しい人物も綜夜と大地、剣道部員の数名を含め少ししかおらず、やや周囲からは浮いた存在となってしまうている。

そんな彼女に、綜夜はよく世話を焼いていた。その影響か否か、大地とも顔見知りになり今では小話をする程度の仲になったが、鉄面皮である彼女がそれをどう思っているか分からなかったが、

やや不安ではあった………今もやや不安ではあるが

「たしか、剣道部か。頑張れよ」  
「……………」

大地の言葉に軽く頭を下げ、パタパタと歩き去る祝の後ろ姿を見た後、帰宅するために歩きはじめる。その瞬間…

ザザザザ……

何かの映像が頭の中を巡る

ザ…ザザザ…ザザ……

それは過去

ザザザ……

それは歴史

……ザザザ

それは実体験

ザアアアア…

それは夢ではない……

自分が見たのは紛れもない現実…

自分が見たのは紛れもない事実…

いにしえ  
古代より続く、逃れることのない…運命…因果…混沌の…系譜

「っ?!ぐっ?!うううつ?!!」

大地は頭を抱え膝を着く…あらゆる記憶…無数の『意思』…飽くことのない『意志』…継がれ行く『遺志』…それらが頭の中をいきなり巡り、激しい頭痛を引き起こす。

「「うあああああ!」」

頭の中から声が聞こえる…

「呼ん…でる…誰…かが…」  
窓際を掴み立ち上がる

「行か…なきや…」  
頭を押さえ、窓を開ける

「俺が…行かなきゃ!」  
身体の中から…力がほとばしる!

「エグゼ…キュート!!」  
自らの力を呼び起こす!

その手には白色に輝き黒い球体が鑢に納まった短剣を持っている。  
すると大地の容姿が見る見る変わる!

制服姿から白い長袖のアンダーウェア、黒い七分丈のコート、白いカーゴパンツに黒いショートブーツを履いた姿になり、黒いゆるい癖のある髪は白い蓬髪となる!



昨日聞いた空の裂け目の音が生じた

「……やっぱ…夢じゃ無かったんだな…」

裂け目から現れたのは4 m程の巨大な異形と1～2 m程の異形達だった。数は50程度だろう

「さつさと…済ませるぞ！」

コートをはためかせながら異形達の中に走っていく！

「黒く染まれ！『殺戮の剣雨』！」  
レイン・スローター

大地の体を黒いオーラが纏い、剣の影を幾百と形作り、雨のように降り注ぎ異形達を貫いていく！

「白く輝け！『断罪の槍林』！」  
グロップ・コンヴァイクト

黒いオーラが薄れ行き、白いオーラを纏う。そのオーラは霧のように辺りに広がり、輝く円錐の木々を産み、異形達を裂いていく！

「まだだ！『殺戮の鞭』！！！」  
ウィップ・スローター

再び黒きオーラを纏い大地はオーラを幾百の鞭に作り替え、敵を風呂敷はらう！！

「終わりだ…『殺し手の』………」  
アサシン

黒と白のオーラを両方纏い、短剣を構えながら屈み込む。

「『乱舞』！！！」  
ダンス

バネのように飛び上がり、全方位の斬撃を放つ！！それは異形達をバターのように裂き、細切れになり、粉微塵となり消え去る！！

「これが……閃光の殺し手アサシンの……力だ……！」  
大地は異形達が消え去ったのを見終えた後、コートをはためかせ叫び声の元に走り出す。

そして、そこにいたのは、互いに髪と眼の色、雰囲気は違えど、見覚えのある……友人……

「お前……！」

「何で……お前が……」

紅月綜夜だった

「何で……何でお前がいるんだよ……大地！」

「そりゃ……こっちの台詞だよ！何だその髪！だっせえなあ！」

イラッ

「それこそこっちの台詞だ！白髪になっちまって、顔が老けてんぞ……！」

ムカツ

「なんだ？！」

「やるかあ？！」

「上等だあ！やってやるよ……！」

と、まあそんな一触即発の口喧嘩の最中、KYにも程があるように裂け目から巨大な異形が現れ

『VVVOOOOOO!!!!!!』

叫び

ブツン…と何かがキレた

「うるっせええんだよおお!!!!!!」

いきなりの敵襲に二人同時に斬り掛かる!

綜夜は縦に紅き一閃!

大地は横に黒白の一閃!

十字になるように斬り裂いた!

『VVVgaaaaaa……』

この異形の登場時間、わずか8秒であった

「…ふう…クソが…興が削がれたぞっ」

「そうだな…とりあえず……」

「説明しろ」

それから5分、互いの記憶、状況、すべてを話し合い…話終わる頃には理由無き怒りは消え、とりあえずは決着した。

そして燃え盛る炎が消え、綜夜も大地も元の制服姿に戻った。  
切り裂かれた空も元に戻り、夕焼けの美しい色が、二人の目に飛び

込んて来る。

しかし、綜夜は鋼色の長剣を未だ握りしめ、空を見つめ、大地はエグゼキュートを握りしめ。

「嫌な感じだ、こりゃ何か来るな」

「そうだな…全く…急転直下の超展開とはまさにこれだな」

綜夜の長剣…イレギュラーデバイス『ブラドエッジ』を構える綜夜とエグゼキュートを構える大地は、先代達から受け継いだ勘が、二人に新たな敵の存在を知らせている…

この世界は今、何者かが張った結界に包まれている。

そして空が『裂ける』のではなく、

『歪み始める』。

「っ…！」

「来やがったな！」

その歪みから現れたのは、巨大な怪物では無く、無機質な鉄の鎧達だった

「コイツ等、いったい!？」

二人の、互いに受け継いだ記憶の中には無い敵、似たような物は掃いて捨てるほどあったが、どれにも一致するのは“邪悪な物”である事だけである。



「アイツ等の手先か？ いや、様子が違う……！ まあ、やる k「やることは一緒…だろ？」 台詞取んなよ！ ……まあそうだがな」

綜夜はブラドエッジを鎧達に向ける。

大地はエグゼキュートを構える

鎧達が二人を敵と認識したのか、眼があるだろう場所が輝き襲いかかる！

「戦闘第二回戦！」

「始めっぞ」

綜夜と大地が地を蹴り鎧達に向かおうとした、その瞬間だった！

「ん？」

——ズガアアアアアアアアアア！

「……What……？」

桜色の光線が、鎧達を横から薙ぎ払った！

「っ、気配！ 敵か？！ いや、アレは………アレは………！！！」

綜夜が驚きを隠せない様子で、光線が発射されて来た方を振り向く。続けて大地もそちらを向く。

そこには

「高町…さん…？」

「綜夜、さん……!?!? 櫻木先輩……!?!?」

そこには、二人と同じく驚いた表情をした、いつもとは違う雰囲気を持った高町なのがいたのだ!

## 狂宴・人形劇（前書き）

踊れ踊れえい！狂乱の人形劇がはっじまるよーい！

## 狂宴・人形劇

「綜夜、さん…に…櫻木先輩？」

「高町さん……？」

「オイオイ、どうしたってここに?!」

「そ、それはこっちのセリフだよ! どうして綜夜さんと櫻木先輩がここに?!」

「あゝ、俺達はだな」

三人は、急な再開に対して互いに混乱していた。  
その背後を、鎧達が襲い掛かる!

「「ッ!!」」

瞬間、綜夜はブラドエッジを振りぬき、大地は身に纏う白いオーラから放たれる楕円の球体を放ち、鎧達を消し飛ばす。

「あ、ありがとうございます…」

「構わねえよ」

「大丈夫だ……だが完全に囲まれたな…」

「だな……んじゃ話は後にしようぜ。まずはこいつ等とランデブーだ!」

綜夜がブラドエッジを器用にくるくると廻しながら言う。

「野郎が二人だな!」

大地はエグゼキュートを構えバリアジャケット戦闘装束を装備しながら綜夜の言葉に

付け加えるように言う。

「う、うん！…行くよ、レイジングハート！」

《All right my master》

なのははや戸惑いがちだったが、すぐさまレイジングハートを構え直し、戦いに備えた。

鎧達が一斉に三人に襲いかかる！

「どこのどいつだか知らねえが！」ガギン！「こういう魔法を使う奴ってのは！」ザシュツ！「いつの時代にでもいるもんだな！」バキイイ！「まったく、よつと！」ザギユン！

「そうだな！」ガガガン！「ヘタレか、策士か！」バギユン！「はたまた五体不満足かあ？！」ズアギイン！

綜夜は懺血の牙に刻まれた記憶から、

大地は閃光の短剣に宿る記憶から、

互いに目の前の鎧に類似した事例を思い出しながら、鎧達を次々に撃ち抜き、斬り伏せていく。

綜夜の言うように、無機物を操って間接的に戦う者というのはいつの時代にも、いつのまにか『お約束』のように現れる。

この手の術を使う者は大地の言うように策士か臆病者か卑怯者か身体に何らかの障害を持つ者か…：

：無論、例外はいくらでもあるし、過去に共に戦った懺血の守護神や閃光の殺し手達の中にもこういう戦い方やサポート方法を好む者はいなかったわけでは無い。

要は、綜夜と大地にはこの鎧達が動くパターンが完全に読めているということだ。

なぜならば綜夜、懺血の守護神と、大地、閃光の殺し手は、あらゆる戦い方の攻略者にして使用者、いわば達人なのだから。

ゆえに二人は鎧達がこういった動きをし、こういった戦法で来るかを完璧に読んでいた。

読まなくてもこの程度の鎧の動きなど、二人には造作もないものではあるのだが。

「よつと……ん、やっぱり中身はないんだなあ」

綜夜は向かってきた一体の鎧の兜をもぎ取ってみせる。

鎧の中は推測通り空洞、代わりに古代の文字でビッシリと呪文が掛かれていた。

「これがこいつらの可動プログラムのようだな」

「ああ……こりやかなり古臭いなア………使ってるやつが時代遅れか、それとも古代遺産ってやつか？」

頭の無くなった鎧をぶった切ると、綜夜は何かを思い付いたのか大地にニヤリと楽しそうな笑みを浮かべる。

その様子を見てやれやれと言わんばかりに苦笑しながら肩を落としながらも同じように頭をもぎ取り、残った鎧を斬り伏せる。

綜夜の目の前には鎧の大群が手には突撃槍ランスを持ち、一斉に彼に向かって突進してきていた。

綜夜は兜をポンとリフティングの要領で真上に蹴り上げる。

「兜を相手の大群に………」

そして、くるりと華麗に一回転すると、渾身の蹴りを兜に放った!!

「シュウウウウウウウウウウッ!!」

兜は赤熱した光弾となって突撃部隊へ向かっていき、凄まじい快音を立てて突撃部隊を蹴散らした。

「超!エキサイティン!!」

両手を挙げて楽しそうに叫ぶ綜夜。

それに続くように、大地は右手で兜を持ち、構える。

「狙うは夢の全員アウト!」

そしてドッジボールのように兜を鎧達に向かって

「おっ!!らああああああ!!!!!!」

声をあげながら投げ飛ばす!

投げた兜は黒白に輝く球となり鎧達を薙ぎ倒し、終いには爆風を巻き起こす!

「イイイイエツツス!!」

大地はガッツポーズを取り最高に楽しそうな声をあげた

その上空で、なのも戦っていた。

「二人とも、なんかよくわかんないけど…凄い……………私たちも頑張ろうレイジングハート!」

綜夜と大地の気迫とテンションの高さに気押された様子なのはであつたが、すぐに気を取り直すと、レイジングハートを構えて鎧達に攻撃を開始する。

「ディバインバスター！」

桃色の閃光、なのはの得意とする砲撃魔法の一つである“ディバインバスター”が炸裂する。

その光に飲まれた鎧達が次々と爆散していく。

“魔導師”高町なのはを知る者なら、知らぬ者はいないだろう、ディバインバスターはそれほど彼女を象徴する魔法の一つなのだ。なのはの持つ大量の魔力、それから生み出される一撃必殺の威力を持つ砲撃。

しかしなのはの特色は威力だけに非ず、天性の才能とも言える砲撃手としての技量の高さ、そしてそれを伸ばし続ける彼女自身の努力。全てが備わってこそ、純白の熾天使<sup>エースオブエース</sup>…高町なのはが存在するのだ。

「もういっかい……ディバイイン、バスター！」

再度ディバインバスターが放たれ、鎧達が蒸発する。

だが、鎧達の数が減っている印象は全くない、無尽蔵に湧いて出る敵に、なのはの表情が曇る。

「前よりも明らかに多いね……フェイトちゃん達、大丈夫かな……」

「へえ、ハラウオンさんも魔法使えるのか」

「はにゃっ?! 櫻木先輩!?! 綜夜さん!?!」



いつの間にか隣に大地と側に付くように綜夜がいた、なのはは驚いて思わず声を上げる。

大地はそんななのはの反応を満足げに眺めると、自分たちを取り囲む鎧達を見回した。

空中、周囲は背後から足元まで敵が取り囲み、虎視眈々と狙っている。

如何なのはが威力のある砲撃魔法を得意としていても、これだけの数の敵が分散していると敵の数を削るのに時間が掛かる。ちまちま戦っていたとしても、結局はジリ貧になるだけだ。

「面倒だな、これだけいると」

「う、うん………」

「……いよし！ 一気にお片付けしちまうか！」

「賛成だ」

「…へっ？」

もつとも、それは普通の魔導師の話である。

懺血の守護神、仮にも神の名を冠する戦士と閃光の殺し手…殺すことを得意とする者にとって、この程度の数など大した事ではない。

綜夜は余裕の表情でブロードエッジを構える。

大地も楽しげにエグゼキュートを構える、その刃からは白い光刃が現れ、長剣のようになっている

「なのはちゃん、1、2の3でありったけの砲撃を正面に撃つてくれ。大地、なのはちゃんのサポートを」

「任せろ。」

「……………うん、わかった!」

大地は快く引き受け、なのはは何をするつもりなのか疑問に思うのだが、綜夜の自身たっぷりの表情と大地の表情を見て信じることにした。

綜夜はニツと笑って見せている表情を見て、大地は呆れたように苦笑し、なのはもフツと微笑んで、レイジングハートを構え、チャージを始める。

三秒間、その短い間に全力全開の砲撃を叩き込むため、なのはは意識を集中させる。

「それじゃあ行くぞ、1……………2の……………」

なのはの体内のリンカーコアが動きを加速する、レイジングハートがカードリッジをロードし、魔力をさらに大きくする。

「「3!」」

綜夜はブラドエッジを投擲する。

「ディバイイン、バスター!!」

なのはが極限まで蓄えた桜色の魔力が、最大威力のディバインバスターとして放たれる。

「カバー・コンヴィクト援護する断罪!!」

大地は短剣から魔力を、なのはの放ったディバインバスターに寄り添うように放ち、白き二重螺旋を纏いし桜色の砲撃とする。

さしずめ「ディバイン・コンヴィクト神聖なる断罪」とでも言えよう

「ブラドエッジ!!」

猛回転するブラドエッジ、それはディバイン・コンヴィクトの射線上でバラバラに砕けた!

ブラドエッジの破片が空中に散らばり砲撃がブラドエッジに直撃し、弾かれた!

逸れたディバイン・コンヴィクトは再び次の破片へと向かい、再び弾かれ、反射板のような役割を持ったブラドエッジに次々と弾かれる!

それはもはや予測不可能、しかし確実に直撃コースを狙う砲撃に鎧達は逃げ惑う意味もなく撃ち落されていく!

ほどなくして爆散の宴は終わり、なのは達を包囲していた鎧の集団はすべて跡形もなく消え去っていた。

「いようし、終わりっ!!」

使命を終えたブラドエッジの破片達は綜夜の元へ帰り、元の一振りの剣へと戻る。

そして指輪となって、ガッツポーズを決める綜夜の人差し指にはまった。

「……すごい……というかなんというか……」

なんとも奇天烈な戦い方だ、となのはは啞然とする。

「色んな意味で、お疲れ」

大地はなのはに労いの言葉をかける。

「にやははは、櫻木先輩こそ「大地で良いぞ」ふえ？」

「櫻木先輩なんて呼びづらいだろ？他人行儀だし」

「それは…でも…」

「もう友達<sup>タチ</sup>なんだし、気楽に行こうや」

「…：はい、わかりました、大地さん」

「うん、よろしい」

「にやははは」

と、二人がほんわりとした会話をしていると

「仲がよろしいようですなあ…」

突然、綜夜が楽しそうなジト目で二人の会話にヌツと割って入ってきた。

「良いだろう、後輩だし友達だし」

「そ、そうだよ、からかわないでよ、綜夜さん」

「ツハハ、ワリイワリイ、っ…！」

ひとしきりに喋った綜夜は誰かの気配を感じ取ったのか、振り返る。

「なのは大丈夫…：そ、綜夜…：？」

そこにはなのはと同じく、キョトンとした顔をしたフェイトがいた。

「俺もいるぞ」

「え？あ、だ、大地?!居たの?!」

「居たの…：って…」

「にゃ、にゃははは……」

「はははは……」

何故か存在をスルーされていたことにショックを受ける大地と、それを見ながら苦笑するなのはと綜夜だった

「驚いたよ、綜夜と大地が魔法を使えるなんて知らなかった」

「私も驚いたわ。綜夜さんと大地さんが剣士ならシグナムのライバルやな」

「俺は剣士じゃないんだが…」

今は所変わって翠屋、奥のテーブルの上にケーキが並べられ、それを食べながらなのは、フェイト、はやて、綜夜、大地が席についていた。ちなみにフェイトとはやてにも、大地による呼び方の訂正が掛けられた。

「俺もみんなが魔導師だなんて知らなかったぜ。あ、なのはちゃん、そのチーズケーキ取って」

「俺もチーズケーキを」

「はいチーズケーキ。でもどうして魔力があるのに、闇の書事件の時の魔力蒐集のターゲットにならなかったの？」

「知らね、運が良かったんだろたぶん」

「な、なんやそれ：櫻g：大地さんは？」

「その頃はちょうど親父とお袋と一緒に海外に居た、俺も運が良かったんだろうな」

「まあ、二人とも運が良かったとしか言えへんなあ、あ、大地さん、チョコケーキ取ってえな」

「はい、どうぞ」

「あ、そうだあの鎧についてなんだが」

綜夜が一番気になっていた話題を切り出すと、三人の表情がわずかに引き締まった。

大地は空気を読まずにチーズケーキを幸せそうに頬張りながら聞いている。

「うん、一週間ほど前から出るようになったんだ」

「目的もどこから現れてるかもわからへん、ただ結界と同時に現れて、私達、魔導師を襲ってくるんや」

「…ふむ…いきたい、誰が、何処で、何の目的で、襲撃してるのかは不明…か…」

大地はフォークをくわえながら考えだす。

恐らくは懺血の守護神…つまりは綜夜が狙いかと最初は考えたが、鎧の出現時期から考えると関連ない事が確認できる。

「ただの魔法テロか？それとも悪い奴のお遊び……か？」

「それがわからなくて困ってるの……いくら倒してもキリがないし……」

「無理もない……確かにあの数は相当だ」

「単独犯じゃないのは確かだな」

大地と綜夜が応えながら頷く。

「でもクロノ達が調査してくれてるから、犯人が分かるのは時間の問題……だといんだけど……」

「クロノ？ああ、フェイトちゃんの義兄さんか」

「うん、綜夜とはあんまり会ったことないけど、クロノは管理局の執務官なんだ。エイミィやリンディ母さんも管理局員なんだ」

「管理局……時空管理局か……」

「……………」

時空管理局……懺血の守護神や閃光の殺し手達とはあまり良い縁の無かった組織である。

懺血の守護神には過去に一人だけ管理局に働いていたし、殺し手の中には管理局に居続けようとした人物も何人かいるが、結局はやめている

（巨大な組織……あらゆる意味で、力を持つ……だが悪い組織ではない。義を持って働いてる人間も数多くいる……が……やはり巨大な組織なだけに、裏で黒い実態が腐るほどある……時空世界を統合しているから、仕方無いといえは仕方無いか）

何度となく懺血の守護神と共にそういった時空管理局の黒い部分と戦った記憶がある。

時には権力を振りかざす横暴な存在を暗殺し

時には他の局員に協力して管理局の裏情報を提供し

そしてある時は『懺血の牙』という懺血の守護神に必要なロストロギアや『閃光の短剣』を巡り命を賭した戦いを……。

（協力関係より、敵対関係の率が高いな……俺達の成すべき事がそういうものだからしょうがない……か……）

元来、閃光の殺し手とは、時空を越えた次元世界の平和を乱し、人々を襲う悪と戦う使命と運命を帯びた懺血の守護神のサポートを担う。

その性質上、時空管理局に潜り込み、情報を流すも、結果としては相反することが多いということだろう。

だが：裏を返せば、それだけ時空管理局の闇の部分が色濃いかを示している、とも言えるかもしれない。

「いよいよし、俺も事件解決に協力してやるぜ！」

そんな闇の色の濃い時空管理局に片足を突っ込んでいる少女たちを案じてかどうかは知らないが、綜夜は立ち上がってチーズケーキを



天高く掲げる。

「いいの？」

なのはは窺うように綜夜の顔を覗き込む。  
綜夜はニカッとその白い歯を覗かせた。

「ったりめえよオ！悪い奴が鳴海の街を襲ってるんだ、なにもしなきゃ男が廃るってもんよ！それに………」

「それに？」

「妹分達が頑張ってたんだ、兄貴分も良いところ見せねえとダメだろ？」

「なら俺も手伝おう」

「ふえ？大地さんも？」

なのはの言葉に大地は、ああ、と頷く。

「俺も後輩達が頑張ってるのに放っとけんからな」

「ありがとう、大地さん、綜夜さん」

「まあ実際のところ、綜夜がバカするのを止めるためだがな」

「なっ、おいおい、そんな理由かよ」

二人のやり取りはその場を和ませ、笑いを誘った。

その後、翠屋で皆と解散した後、大地は片手に缶コーヒーを持ち、公園の椅子に座っていた。

（……時空管理局……たとえ巨大な奴らだろうと……綜夜達や、海鳴の皆は……）

一気に飲み干した缶を握り潰し、ごみ箱に放り込む。

「……俺が…護る！」

空を見ながら大地は新たな決意を秘める

**接触・歴代の殺し手達（前書き）**

どろどろ投稿するよゝゝ!!

## 接触・歴代の殺し手達

チエーン・コンヴィクト  
「断罪の鎖！」

大地の右掌から白く輝く鎖が現れ、異形達を貫いていく。

「やれやれ、朝の強襲は今回で何回目だ…」

早朝から現れた怪物達を倒した後、そう言いながら大地は左手に持つ缶コーヒーを飲む。

なのは達に事件解決に綜夜と共に協力すると言って、早一週間が過ぎていた。

大地達が倒した鎧の数は、既に四桁を越してしまう勢いである。

そして、懺血の牙と閃光の短剣を追う者達からの追っ手であり、綜夜と大地のみを隔離する特殊な結界と共に現れ襲い来る巨大な怪物達。

普通の魔導師達なら苦戦する相手だろうが、二人からしてみれば単なる雑魚だ。

厄介なところがあるとすれば、いささか現れる時間が不定期だ、ということだろうか。

夜明け前、朝、夜中、一番困るのが授業中で、結界の存在を感知すると授業をサボらなければならない。

もつとも、それはなのは達と戦っている鎧と同じで、どちらも迷惑極まりない存在であった。

「どちらの件も進展は無し…全く…動きがなければ動きようもないが……」

しかも、どちらの事件も未だに進展していない。  
犯人も目的も何も分かっていない、五里霧中という例えが見事に合う。

だからこそ何も対策を練らないまま進むのにはいけない。

ついに今晚、鎧に関する事件について、会議を行うそうだと。

当初は八神家で行われ、時空管理局のリンディを筆頭としたのは達を含む局員勢、そこに民間協力者である綜夜、大地が入り、計十四名のメンバーで今後の動向などを決定するらしい。

ちなみに、綜夜と大地は、誰にも自分の中に『懺血の牙』や『閃光の短剣』というロストログアが宿り、それによって守護神、あるいは殺し手に覚醒、つまり魔法を使えるようになったことは一切話していない。

母親を異世界から来た魔導師ということにしておき、彼女から剣術や魔法の手解きを受けた、という“設定”になっている、少々気は引けたそうだが仕方ないだろう。

だが大地は両親が生きているため勝手が違う、正直に話さなければ、と思っていたのだが綜夜が急に大地も両親を異世界から来た魔導師だったという設定の話をしてながらでうちあげの昔話をしたため、何とか難は乗り越えた

だが問題はリンディを始めとする、筋金入りの管理局員達だ。

法の番人でもあり、強力な情報の供給ラインを持っている彼らに、生半可な嘘はつけないだろう。

いざとなれば二人とも正直に事情を説明するつもりだが、なるべく隠し通す予定である。

疑るのはあまり好きでは無かったが、懺血の牙や閃光の短剣を狙っている奴らは管理局という説も捨てきれない。

あまり騒ぎを大きくしてしまうと、護るべき者達が無駄に傷ついてしまうかもしれない。

なのは達は、確実に綜夜や大地を一人で戦わせはせずに、あの怪物に果敢に立ち向かっていくはずだ。

だが、正直な話、なのは達の実力ではあの怪物は一匹倒すのでやっただろう。

そこで大地は綜夜に彼女等を鍛えようと話す

「んなこととして強くなったら、余計にアイツらと戦おうとすんだろそんな危ない戦いに、可愛い妹分達を巻き込むわけにはいかないっての。ちったあ考えてみるよ」

そう言っただけの提案は否定された

だからこそ：綜夜は、わずかに後ろめたさを感じつつも、なのは達に嘘をついたのだった。

「考えたままじゃ始まらない……とりあえずは登校しなきゃな」  
そう言っただけの大地は、学校に向かうのだった。

時は跳んで昼休み

屋上で男友達と昼食を摂り、やや軽い足取りで屋上から教室に戻っていく途中に綜夜とその友人がいた。

「ああ、この忌々しいクマちゃんですか？　なんだが最近寝不足なんですよ……」

「夜更かしは、肌が荒れるぞ（荒れますよ）」

「ああ！櫻木さんどうもです！って二人ともユニゾンでそんなに言わないでください！今結構実感してるんですから！」

悲痛な叫びを上げるのは、かざしたあかね風下茜、綜夜と大地のクラスメートであり綜夜の友人の少女。

下宿生であり、綜夜のボロアパートや大地の家の近くにある高級マンションの上の方の階に住んでいる、いわゆるお金持ちのご令嬢というやつだ。

『私立聖祥大付属高等学校』、というかこの私立学校全体に、そういった金持ちの娘息子、つまり言うところのボンボンが多く、彼女もまたそのうちの一人、ということだ。

「ならなぜ早く寝ないんだ？」

「あゝ……うゝ……それは、まあ乙女の秘密です、聞かないでお願いください」

「乙女の秘密ねえ」

「なにそれ気になる、超気になる」

「うふふ、秘密は女の子の魅力を底上げするんですよ……」

「「クマのついた疲れ顔で言われても説得力がないぞ、風下（風下さん）――！」」

「うふ、うふふふふふふふふふ……おトイレ行って

きます」

「保健室に行ったほうがいい気がするがな、壊れかけてるぞ風下」

何やら疲れているらしい緑髪セミロングの眼鏡少女の背中を、海鮮ヤキソバパンをかじりながら見送った。

千鳥足でふらふらしている茜はなんとなく危なっかしかったが、周りの女友達に支えられてずりずりと保健室に連行されていたので、おそらく問題はないだろう。

その後も、特にこれと言った事件もなく、平和な、いつも通りの日常が過ぎ去っていった。

そして放課後、大地は自宅に帰宅した後、八神家に向かっていったが、違和感を感じていた

「……異様に……静かだ……」

そう、住宅街の中を歩いている割には人々の声が聞こえていない。と、その時

ス……と大地の目の前に何かが現れた。

「っ、閃光の短剣……?!」

そう……今は『エグゼキュート』として在るはずの『閃光の短剣』が、目の前に在るのだ。

『……』

閃光の短剣は何も言わず、ただ「着いて来い」と言わんように輝く。



「…まだ会議には時間があるか……よし」

腕時計を見て大地は時間に余裕があることを確認し、閃光の短剣に着いて行くことにした。

閃光の短剣に導かれながら10分ほど歩き、短剣が動きを止めた

「ここは……館……？」

そう、目の前には西洋の建築洋式の中にも和の心が添えられたような古い館が建っていた。

「……中に入れてことか……？」

短剣は肯定するように輝き、館の中に入っていく。

大地は若干不審に思いながらも、館の中に入っていく

「……………」

入口に入った大地は玄関内の装飾に目をやっていく。あまり建築洋式には興味は無い彼でもその装飾の質素で優美な様は良く分かった。

「ようこそいらっしゃいました……」

ふと、顔を前方へ目をやると、そこには和風のメイド服に身を包む女性がいた

「皆様がお待ちです……どうぞこちらに」

「皆：様：？」

メイドは大地を促すように言い、奥へと向かう。大地は少し躊躇うが、メイドに着いていくように歩きはじめる。

「皆様はこの先におられます：それでは失礼致します：」

程なく、奥の部屋に続くドアの前に着くとメイドは会釈し、去っていく。

「鬼が出るか蛇が出るか：はたまた神か：」

そう言いながら大地はドアを開け、中に入る。

中は暗く良く見えないが何人かの人の陰が見える

「誰だ：」

大地は警戒心を放ちながら尋ねると

「まあ、そう警戒しなさんな。俺達はお前の仲間だ」

警戒した声と気配を感じたのか陽気な声をした何者かが闇の中から声を掛けて来る。声の若さと低さからして青年のものだろうと大地は考える。

「なら顔を見せろ。顔が見えなきゃ信じようにも信じれない」

「なんじゃ？おまいさん、わしらを信じれんのか？仮にもおまいさんの先輩じゃぞ？」

大地の言葉に先程の声とは別の、しわがれた声：恐らくは老人のものだろう。

「なに…?」

大地は怪訝に感じる。

すると部屋に明かりが付きはじめた。

そこにいたのは声の主を含め4人いた。

褐色肌に白い髪と碧い双眸と逞しい身体が特徴的な男

子供並に小柄な身体にオレンジ色の長衣に白い縁無し帽子、肩から斜めに袋と穂の部分が螺旋状になった長槍を掛けた老人

殺し手本来の戦闘装束を着こんだ青年。

そして金色の双眸と黒紫色の長い髪を揺らす、シスターの服をより活動的にしたような服を着た女性が座っていた

「いよっ、はじめまして、だな」

男がウインクをしながら話し掛ける。

「あんたは、まさか…!!」

「察しがついてるみたいだな、現役君」

「何で…あんた達が…歴代の殺し手のあんた達が…ここに」

そう、目の前にいる三人は、かつて閃光の殺し手として任を果たし、

それぞれが任を終え、各々が偉業をなした者達である

「多分わかってんだろうが、自己紹介させてもらうぜ。俺は『灰かぶりの殺し手』アンダルシア、先代・閃光の殺し手だ」

アンダルシアと名乗る男は、褐色の肌とは正反対に白く輝く歯を露にし、ニカッと笑う。

「わしは『翁の殺し手』ザルディ・ハッサ…三代目の殺し手で、おまいさんと同じ地球の出身じゃ」  
しゃがれ声で小柄な老人、ザルディ・ハッサは細い目をにこやかに曲げ、会釈する。

「……『紫暗の殺し手』アリス…よろしく…」  
黒紫色の髪を靡かせながら頭を軽く下げる。

「『不可思議の殺し手』ガティートだ、よろしくな。」  
青年は敬礼のような挨拶をした。

「だから…なんであんた達歴代の殺し手さん達がいるんだ…」  
ようやく自己紹介が済んだため、気になったことを尋ねる。

「この館の中は閃光の短剣が作り上げた歴代の殺し手達と対話するための空間じゃ。」

「いったい何のために…このタイミングで…」  
ザルディの言葉に大地は若干戸惑いながら尋ねると

「……それは閃光の短剣のみぞ知ること…理由はわからないわ。」  
アリスが疑問に答える。

「……………」

「ま、とにかく仲良きこうや、兄弟」

押し黙る大地と肩を組むアンダルシアは嬉しそうな表情であるが、それを見るザルディとアリスはどこか浮かない表情であった。

「アリスよ…この兆候…おまいさんはどう見る」

「わからないわ…ただ…嫌な予感だけはするわ…」

「ふむ…おまいさんもか…」

ザルディは顎を撫でながら思案する

「ジジ様も…?」

「うむ…」

「…………この予感だけは当たってほしくないわね」

2人のこの会話は離れていた大地とアンダルシアには聞こえなかった。

もう一人の殺し手、ガティートは、アンダルシアと大地の様子を面白そうに見ていた。

それから30分程経った頃

「っと、そろそろ行かなきゃな…」

「お?どっかに行くのか?」

「ああ、今の守護神と俺を交えて管理局が今の敵と対処する会議があるんだ」

「管理局と今の代は友好的にしとるようじゃの」

「ああ、管理局に仲間がいるんでな」

大地の言葉にザルディは成る程、と頷く。

「そうなのか……」

「なあダイチ、仲間は大切にしろよ。……失ったら取り戻せねえんだからよ」

先程まで明るい笑顔を見せていたアンダルシアの声と表情が一瞬くもるのを大地は見逃さなかった。

「アンダルシア……」

「アンで良いぜ、ほら仲間が待ってんだろ？行ってこい。」

アンダルシアは笑顔のまま大地の背を押す。

「っ、おおおっ、アン……！っ……なっ……！」

押された大地が振り返るとそこには、海鳴の住宅街が広がっていた。

「……………」

「ふえ？大地さん？」

まるで夢のようだと言っていると、背後から聞き慣れた声が聞こえて来る。

「っ、あ、高町……さんに、テストロッサさん。」

「どうかしたの？」

「ボーツとしてみたいだけど」

そこには仲の良い後輩、なのはとフェイトがいた。

「いや……ちょっと考え事をしてただけ、いまから八神さん家に行く

とこだ」

「なら、一緒に行くの」

「私達もちようど今から行くから」

大地ににこやかに笑いかけるのはとフェイトの申し出に、もちろん、と微笑み八神家に向かった。

## 人物・歴代の殺し手 グループA

提案者…酸欠帝様

名前…アन्दルシア

年齢…??

魔力量…S++

ランク…SS

魔力色…灰

術式…超古代式

身長…172cm

体重…58kg

『灰かぶりの殺し手』という異名を持つ、先代閃光の殺し手。  
褐色の肌と碧眼を持つ逞しい男。

暗殺術に長け、前線で戦うよりも闇夜や群集に紛れての情報収集や、暗殺などで当時の懺血の守護神をサポートした。

得意とする武器は投げナイフとハンドサーベルで、エグゼキュートはあまり使わなかったらしい。

性格は意外にも陽気で冗談好き、だがやはり抜け目の無い食えない男だったようだ。

孤児であり、多くの仲間と協力して食いつないで来た過去を持っていたらしく、非常に仲間思いだったとされている。

殺し手としての指名を終えた後は、時空を超えて活躍する義賊となり、多くの世界に正義の伝説を残して回ったという快男児である。



他の殺し手達にはアンという愛称で呼ばれており、彼自身もその愛称を気に入っている。

名前…ザルディ・ハッサ

年齢…??

魔力量…SS+

ランク…SS++

魔力色…橙

術式…超古代式

身長…125cm

体重…34kg

『翁の殺し手』という異名を持つ、三代目の閃光の殺し手。

子供並に小柄な身体にオレンジ色の長衣、白い縁無し帽子姿と、肩から斜めに袋と穂の部分が螺旋状になった長槍を所持している。

得物が得物であるため情報収集以外は表立って行動していた。

元は名のある道場の師範だったが、閃光の短剣に選ばれたため道場を去り、その知識と経験を当時、まだ戦闘知識が浅かった懺血の守護神のサポートをしていた。

彼もまたエグゼキュートをあまり使わず、小柄ながらも長槍を操り、騎馬戦で守護神を支援していた。

通称は『ジジ様』や『ジイさん』『ハッサ翁<sup>おう</sup>』

掴み所が少なく、疑問や不安を持つ者に時に率直に、時に問い掛けのように答える

名前…アリス

年齢…??

魔力量…不明

ランク…不明

魔力色…黒紫色

術式…超古代式

身長…161cm

体重…【アリスによって数値が切り刻まれた】

スリーサイズ【血で滲んで見えない】

『紫暗の殺し手』という異名を持つ、歴代の閃光の殺し手。

彼女はエグゼキュートを媒体とした防御魔法や射撃魔法、広域魔法による遠距離・遠隔攻撃で守護神をサポートした。

性格は物静かで仲間思い。

基本的には守護神と共に行動し、情報は民間人や管理局内の友人から聞き出す等、意外にも人望は篤い。

エグゼキュートの結界内ではアリスやシアン（二つ名の「紫暗」から）等と呼ばれてる

## 始動・会議と不安とフラグ構築

「おっせえぞ綜夜！」

予定から少し遅れて来た綜夜に、玄関先でヴィータが激を飛ばした。

「わ、悪い悪い……ガッコーで先生に捕まっちゃまってよオ」

「つたく……会議始まるぞ、言い訳は良いから早く来いって！」

「お、来たみたいだな」

大地の言葉に答えるようにヴィータと共に綜夜がリビングに上がってきた。既に綜夜を除く全員は来ていた。

そこで綜夜は管理局員であるクロノ達と対面、質問をされるもなんとかごまかしたのは別の話。

更に言えば先に来た大地も以前、綜夜が作り上げたでっちあげでごまかしたのもまた別の話

そして、会議が始まった。

「それで、ここ一週間の鎧の出現ポイントの統計がコレ」

管理局員で優秀なオペレーター、エイミィ・リミエッタが持ってきた異世界製の機械が映し出すホログラムの鳴海町の地図に、赤いポイントが映し出される。

現在作戦会議の真ただ中だ、皆まじめな顔をしてホログラムの鳴海町の地図を観ている。綜夜は腕を組みながら、ソファーに座るのは達のの後ろに突っ立って、猫背になりながらホログラムの地図を眺めていた。

なのはが、何かに気付いたように声を上げる。

「……鎧があらわれるポイントが、毎回意外に近い……？」

「そそ、なのはちゃん正解、データを取るまで気付かなかったんだけどね」

「つまり、鎧達を生み出してる犯人はアジトから動いてないってこと？」

続いてフェイトが考え込むようにつぶやく。

「そう考えられなくもないな。だとしたら此方にとっては好都合極まらないが」

フェイトの義兄、黒髪のクロノ執務官がそれに同意した。

クロノは綜夜と同じ年の少年で、てっきり自分より年上だと思っていた綜夜は大変驚いていた。

「相手の居場所が分かればこっちの物だな！」

「分かれば、の話だがな……」

「うぐぐ……テンション下がる事言うなよな執務官さん！」

「綜夜、そうは言ってもそれが現実だ。だがクロノも戦意を削ぐよ

うな言い方は無しだ」

「わあってるよお」

「む……すまない」

綜夜とクロノは対象的で、クロノが理詰めで行動するタイプなら、綜夜は己の感情と感覚に従って行動するタイプ、そして大地は二人のようなタイプを制御する、騎手のような存在である。

フェイトはそれを少しだけ面白いと感じていたのは、小さな内緒だ。

「……どちらにせよ、皆にはもうしばらく鎧達を凌いでもらうしか無さそうだな」

クロノが溜め息をつく。

エイミィが機械のスイッチを切って、ホログラムの地図を消した。

「でも、今度本局の方から増員が来るんやろ？」

「ええ、あなた達ばかりに苦勞はさせられないものね」

エメラルドグリーンの髪を持つ、フェイトの義母、クロノの実母であり、今この場の総監督であるリンディが頷いた。

「明後日にはつくそうよ、それまで、悪いけどあなたにも協力してもらおうね、紅月君」

「イエスマム、こんなしがない一介の剣士の力でよければ、幾らでもお貸ししましょ」

「右に同じく、よろしく願います」

綜夜が大袈裟に頭を下げ、大袈裟に言ってみせ大地が丁寧な挨拶で丁寧な頭を下げると、リンディは面白そうに笑って。

「ふふ、ありがとう、頼りにしてるわね」

少し話してみてもリンディ達は管理局の人間の中で、善良な部分に入るといふ事が分かった。

これは過去の管理局にいながらにして殺し手だった先輩達の記憶を基にした大地の推測に過ぎないが、少なくとも、彼らは他人のために仕事をしている方の人間というのは確実だろう。恐らくは綜夜もそう感じているだろう。

閃光の短剣が伝える負の感情の記憶の中にある、あらゆる欲にまみれたような、そんな胸がムカムカする下卑な輩ではない。

鐵血の守護神や閃光の殺し手などの秩序を護る者と同じように、己<sup>おの</sup>が魂に高潔な誇りを持っている人々だ。

大地は安堵を覚えながらも同時に不安も覚える。

（本局から増員……まともな人間なら良いが……）

明後日に到着すると言う、本局からの増員は、綜夜と大地、二人にとつて大きな不確定要素の一つだ。

管理局の本丸である本局、時空世界の中で最も力を持つ組織の一つと言つても差し支えはないだろう。

故に時空世界の中でも最も影が黒く、大きく歪んでいる組織の一つ、と言えるだろう。

（…………くそ……悪い考えが頭を埋め尽くして来る…要厳戒体勢だな…）

大地は、不確定要素に不安を募らせていく。

そうこうしている間に時間が過ぎて行き、会議は終わっていった。

「それじゃあ、皆今日はお疲れ様、ゆっくり休んでね」

なのはとフェイトはどうやら八神家に泊まって行くらしく、リンディ達は一足先に帰って行った。

「んー、じゃあ俺も帰るかね」

綜夜はポリポリと頭を掻きながら言う。  
が、その背中に声かけられた。

「紅月、少し顔を貸してくれるか」

「おやおや、シグナム姐さん、どったねよ?」

綜夜を呼ぶのは『八神家の姐さん』（基本的に綜夜が使う）や『おっぱい魔人』（専ら弄り屋になってるはやてや拗ねているヴィータが使う）こと、主<sup>はやて</sup>に仕えるヴォルケンリッターのリーダー格、『烈火の将』シグナムであった。

「噂によると、お前は中々腕の立つ剣士だそうだな」

「……<sup>デート</sup>模擬戦のお誘いってヤツ?」

噂、おそらくはやてが言ったんだろぅなあ…と、大地は二人のやり取りをボーッと見ながら未だに不確定要素の事を考えていた。

「だあいち、さん」

ふと、自分を呼ぶ声が聞こえてきた大地は声の元を見る。  
そこには顔を覗き込むのがいた。

「高町さん…どうかs「なのは、なの」え…?」

「大地さんも呼び方を変えさせたんだから、次は大地さんが私達の  
呼び方を変えるの」

と、なのはは呼び方の修正を求めてくる。

「…わかったよ、なのはちゃん」

「にやはは、ありがとうなの。」

「さて、なのはちゃん、何か用事だったかな?」

「気分転換しませんか?」

「気分転換?」

なのはの提案に大地はキョトンとする。

「これは……どう考えても……」

模擬戦だろ……

大地はそう、考えていた。

目の前には白いバリアジャケットに身を包んだなのはがいる。結界  
は大地が展開している。

場所は綜夜が毎日行く海鳴の海が良く見える丘の先にある公園であ  
る。



“そこはデートでなのはフラグの基盤建設じゃないのか？”

「む……？電波きのせいか…」

大地は何処からともなく聞こえてきたような声を無視することにした。

「大地さあん？そろそろ始めますよー！」  
少し離れたなのはが声をかけてくる。

「ああ：始めようか！エグゼキュート！」  
大地の身は古くから伝わる黒白の戦闘装束に包まれ、髪は白く輝く髪に、瞳は普段より、より深い黒い瞳になる。その手には短剣エグゼキュートがある。

「気分転換だから軽くしてほしいの」  
《Acceler shooter》

軽くしてほしいと言いつつ、なのはは周りに桜色のハンドボール程の球体が十数個、展開している。

「わかった……断罪レイン・コンヴィクトの剣雨」

大地の周りにも白い魔力の剣を十数個作り上げた。

二人とも『銃口』を向けあったまま『弾丸』は放たない……敵の様子を伺っているからである…

暫くの沈黙……

そして

「シューット！！！！」

「行け！！」

互いに光弾と光剣を放つ！ぶつかり合った光は爆散し、煙の壁が造られる。

《Divine shooter》

「シューット！！」

なのはは煙の中に光弾を放つ。

「まだまだあ！」

大地は飛んで来る桜色の光弾を斬り伏せながら煙の中から現れる。

「デイベイインバスターアア！！」

なのははすかさず、そして癖のように追撃の砲撃魔法を放つ！

だが

「甘い！」

大地にそれは通じなかった。大地はエグゼキュートから光刃を展開し、砲撃を切り裂く！

大地はそのまま跳躍し、一気に間合いを詰める！

「ふえあっ！？」

なのはの声が聞こえる時には既に首筋に光刃を消した短剣がわずか数mmの間を空けてるまで近づいていた

「俺の勝ち…だな…」

「ふええ…大地さん強すぎい…」

「んなもん、軽くやるって言ってたのにディバインバスター噛ますなのはちゃんが悪い、だがまあ、俺に少し力を使わせたのは褒める場所…かな…?」

そう言いながら大地はなのはの頭をポンポンッと叩き、そのまま手を乗せなのはの頭を撫でる。

「ふにゃあああ……………」

なのはは大地に撫でられることがうれしいのか気持ちいいのか頬をほんのり染めながら、しばらく撫でられっぱなしだった。

それから数分後

大地となのはは海鳴の街の公園のベンチに座っていた。

大地の手にはブラックコーヒーの缶が、なのはの手には粒入りオレンジジュースの缶があった。もちろん、大地の奢りである。

「大地さん」

「んお…?」

急に呼び掛けられた大地は変な声を出してしまうが、なのはは構わず続けた。

「この事件が済んだら、皆と一緒に温泉行きませんか?」

「そうだな、慰労会も兼ねて、皆と行くか。」

「じゃあ、温泉行ったら卓球しましょう」

「そうだな。出来るなら枕投げでもするか?」

「そうですね、にやはは、今から楽しみになってきたの」  
なのはは温泉での行動を考えながら、嬉々と笑う。

「だったら、事件の早期解決、頑張ろうぜ」

「あ、はいっ。」

大地が立ち上がり握り拳をなのはの前に出すとなのはは意味がわかったのか自分も握り拳を作り、こっん、とぶつけ、指切り代わりの約束を…そして、互いに頑張ろうという意思を示した。

その時の二人の顔には優しい微笑みがあった……。

しかし…この約束は、意図も簡単に破れてしまう事など、今はまだ、誰も知り得なかった…

## 邂逅・銀剣の男

会議となのはとの模擬戦から、二日――。

鎧も怪物も現れず、実に平和な一時を大地は学校で過ごしていた。一ついつもと違うとすれば、クラスメートの風下茜が休んでいる、という事だけだった。

どうやら体調不良らしい。

「体調が悪いとは言ってたが…心配だな…」

「なんだ櫻木い？ 風下がいなくてワタシ寂しいわあってのか？」

大地は自作のハンバーガーを頬張りながら、屋上から空を眺める大地に、同じく屋上でのんびりとするクラスメートの悪友、酒見大<sup>さかみた</sup>徒<sup>いと</sup>がちょっかいを出して来た。

「ふむ……綜夜と一緒に見舞いにでも行ってやろうか」

「おーい、ちょっとー、無視ですかい櫻ぎゅふっ!？」

大徒がなにやら喚くのが煩くなってか、大地はリアットで問答無用に黙らせた。

ちなみに、その判断は“大地の経験”から判断している。

まあ“閃光の短剣の経験”からも、あまり本気で相手をするのは骨折り損以外の何ものでもない、と判断できるのだが、この手の友人はこうでもしないと後から煩いと知っていたからだ。

「さて…そろそろ向かうか」

大地が体育の授業に遅れないように向かおうとした時…

「おう！大地い！体育オレの授業に間に合うようにしとけよ！」

「ゲン先生、今から向かうところだよ」

こんがりと焼けた肌の上には黒いタンクトップに迷彩柄の七分丈ズボン、足にはカーキ色のサンダル、白髪に茶色い眼、白く輝く歯と白い顎髭が特徴的である。

その顔立ちは体育会系の身体に見合う若々しく逞しさに満ちた30代ぐらいの容姿ではあるが、彼の実際の年齢よわいは45である。

その容姿、担当科目、年齢故か度々高等部と大学部の女子に告白されては振っているのは別の話である。

「そうか、そうか。ハッハッハ、遅れねえように気をつけんだぞ！」  
バシバシと大地の肩を叩きながら朗らかに笑うゲンを大地は先輩のように、ゲンは後輩のように慕い、下の名前で呼び合っている。

「つと、俺が引き止めてちゃあざまあないな！早く行けよ！」

「はい。」

そう言って大地とゲンは別れた。

その後クラスで唯一遅れた綜夜にゲンはグラウンド10周させたのはまた別の話であった。

夕暮れ時。

ハオラウン家の一室で、エイミィ・リミエツタはディスプレイに向かってデータと格闘していた。

「もう少し……もう少しで割り出せる……」

今までなのは達が戦ってきた鎧達、その出現ポイント。それらをまとめ、データ化し、犯人の場所を割り出す。なかなか難しい作業ではあったが、諦めずにやり続けたここ数週間の頑張りがもうすぐ身を結ぼうとしている。

「居場所なんか分かったら、あんたなんかイチコロなんだからね……?」

エイミィは不敵に、もう少しで尻尾を掴むことのできる犯人に、聞こえない挑発を試みせる。

「これで……チェックメイトよ!」

そして、エイミィが最後のデータをディスプレイに打ち込もうとした、その時!

けたましい警告音と共に、ディスプレイが強制的に切り替わる。

「敵?! こんな時に……!」

エイミィは歯を食いしばる。

外のクロノ達が異変を感じ取ったらしい、ディスプレイ上の地図にクロノやヴォルケンリッターと言った仲間たちの反応が現れ始めた。やや遅れてなのは達の反応も現れ、綜夜と大地という二人の民間協力者も現れる。

「皆、お願いね……って……へ……なにこれ……?!」

エイミィは再び最後の作業に入ろうとする、一刻も早く犯人の居場

所を割り出そうとしたエイミィであったが、次の瞬間、その表情は氷りつく。

地図上に現れた鎧達の数、いつもならば多くて2百体ほどのその数。

しかし、今エイミィの目の前にあるデータは、鎧達の総数は、いつもの十倍……いや、三十倍……！！

約六千体の鎧達が、海鳴の街に現れたのだ……！！

しかも数はなおも増え続けている……！！

「クロノ君……！！！」

エイミィは不安を覚えるが、すぐさま今自分がすべきことを思い出し、データをディスプレイに出す。

（犯人の居場所さえわかれば……！！！！）

今はオペレータとして、自分にできることをする。

エイミィは再び作業を開始した。

「この数は……異様だ……」

綜夜は渋い表情をしながら驚愕する。

結界が張られ、外に出てみれば、空がすべて鎧達の大群で覆い尽くされているではないか。

そう……ただ異様で……ただ異常だ。

そしてその雲の所々では爆発が起こっている、仲間たちが戦っているのが分かる。

大地はごく自然に当たり前のように、エグゼキュートをセットアッ



プする。

そして……闇に溶け込むように走り出す

「さて……少々本気出そうか……！」

大地そう言うと、助走をつけ暗い鉄の空へ飛翔する。

刹那、十……否、五十は下らない鎧達がランスを構えて突撃してくる。

「失せろ！！」

エグゼキュートを横一線に振り抜き、鎧達を真っ二つに破壊する。その時振り撒かれた魔力の霧が、断罪の剣雨となり追撃として鎧達に突き刺さっていく。

そして突き刺さった魔力の槍は次々に爆散、周囲の鎧を巻き込んでいく。

しかし次から次へと鎧達は現れ、大地へ攻撃を仕掛ける。その時、ちょうど対面になる位置にも鎧達が集まっている。すぐにそれが深夜だというのは大地は直感で気づく。

軽く斬り伏せ、次、また次、更に次……無尽蔵に湧き出す敵、大地には何ともなかったが、他の仲間たちは苦戦しているに違いない。管理局からの増援は、一体どうなっているのか、と文句も言いたくなるが、しかし言っている場合では無いのも事実である。

「オオッラアアア！！！！」

大地は一心不乱にエグゼキュートと補助攻撃の攻撃魔法で敵を斬り・裂き・碎きながら、仲間達のいる方へ駆けて行く。

「あああ！クソッ！！邪魔ッ！だあああ！！！！」

だがやはり、鎧達が大地目掛けて突貫してくる。

数はやはり多く、大地はエグゼキュートに纏う魔力を放ち鎧達を叩き伏せていく。

その時……

………ゾッ………

「っ!？」

背中に、首筋に、心臓に、脊椎に。

急所全てに刃を突き付けられているような感覚が、大地を襲う。凄まじい殺気、純粹な狂気だった。

だが、その源は…恐らく綜夜のいる場所だろう……ただその殺気・狂気はそれ程離れていても感じてしまうものであった…恐らく自分以上に綜夜はその気を我が身に受けているだろう…

閃光の殺し手ですら、否、閃光の殺し手からこそ、大地もその殺気に“恐怖”を覚える。そしてすぐさま身をよじり回避する!

その瞬間に全ての鎧達は、綜夜のいた場所から放たれた青い一閃で、バラバラに砕け散る!

大地は補助魔法を使い、肉眼で倍率変換を行い大地は急いでその根源を見る。

そこには、ただ一人の“剣士”がいた。

流れるような亜麻色の髪、凜とした雰囲気を持つ青い目。  
手には麗しき輝きを放つ銀剣を持つ男が、そこにいた。

（こいつが……本局の増援……）

男からは殺気はおろか、一寸ほどの敵意も、邪念も感じ取れない。

その容姿から紳士的な男だと言うことは大地にもわかった。

しかし同時に、得体の知れない違和感のような、身体に纏わり付くような不気味な何かが、男から滲み出ているのも感じていた。  
だが、すぐにそれは思考の端に追いやられ、綜夜の元に向かう。

「綜夜！！」

「っ！ やっぱりアレ大地だったんだな！」

「ああ、彼が本局の？」

「キリカ・イズルだ。君が櫻木大地君か。キリカで良いよ」

「よろしく、キリカ。」

互いに挨拶を終えた所で綜夜が、とにかく！と開口し、続けて

「この状況、何が何だか分からんが、行くぜ、キリカ！ 大地！」

二人に声をかける。

「任せてくれ、行くぞ、シルバー！」

「ああ！ やるぞ！」

そして二人の剣士と一人の殺し手はなのは達のいるであろう方向へ向かう。

鎧達が行く手をさえぎるが、三人の剣の前には、紙クズ同然であった。

道中で大地と綜夜はキリカの戦いぶりを観ていたが、その腕前はまさに“剣豪”と呼ぶに相応しかった。

臨機応変、柔と剛を兼ねそろえた剣捌き……キリカは、相当の達人であった。

（凄まじいな……一騎当千とはこのことだな。）

恐ろしく強いキリカに大地は畏敬の念を感じた。

（顔、スタイル共に良し、性格もよさげだな、しかも強い。女の子にモテる要素は全部持つて……か……だが……）

別段羨ましくはなかったが、大地はキリカの横顔を観ながらそう思う。

すると、頭の中へ声が届いた。

（――皆、聞いて！）

「念話！？ エイミィさんか！」

「どうした？！」

（犯人の居場所が分かったわ！ 座標はJ―24！ 高層マンションの屋上よ！）

綜夜と大地はすぐにハッと、その場所の意味に気づく。

次々に飛来する鎧達の本拠地、犯人の居場所、その場所が、綜夜と大地の良く知る場所だったからだ。

「紅月君、櫻木君……！？」

キリカが大地と綜夜の異変に気づき、声をかける。

綜夜は頭を振り、大地は眼を閉じ……。それぞれが思い浮かべた最悪の状況を振り払う。

「クソっ……。！外れてくれよ、俺のクソツタレな予想よオ……。！」

そう、その場所は、そのマンションは、綜夜と大地……二人のクラスメートである、風下茜の住んでいるマンションだったのだ――。

## 人物・梶間ゲン

名前…梶間 ゲン

年齢…45

身長…205cm

体重…100.8kg

私立聖祥大付属高校の体育教師。感情の起伏が激しい。

こんがり焼けた肌に白髪に茶色い眼、白く輝く歯と白い顎髭が特徴的。服装は黒いタンクトップに七分丈のズボン、足は常にサンダル。

竹を割ったような性格で義に篤く、どんな人間にも事情を聞き納得すれば手を貸す。

その顔立ちは体育会系の身体に見合う若々しく逞しさに満ちた30代ぐらいの容姿ではあるが、彼の実年齢は45である。

その容姿、担当科目、年齢故か度々高等部と大学部の女子に告白されては振っているが理由は不明。

**発現・災禍の根源（前書き）**

連投、連投、続々連投！！

## 発現・災禍の根源

「ギガントオオ！！シユラアアアアアアアク！！」

無数に現れる敵。

「駆けよ隼——シユツルムファルケン！！」

無限に湧き出る、鎧、鉄の外皮のみを持つ、奇妙な襲撃者。

「サンダー……レイジッ！！」

無尽蔵に迫り来る、それらを斬り、潰し、爆散させる。

「デアボリック・エミッション！！」

ひたすら、

ただ、ひたすら、

ただただ、ひたすらに。

「デイバイイン、バスタアアアアアア！！」

何体の鎧を打ち碎いた？

何体の鎧を切り刻んだ？

何体の鎧を塵芥と変えた？

「ておああああああッ！！」

十？——下るまい。



「クラーヴアイントツ！」

百？——いや、まだ多い。

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト！！」

千？——もう考えるのも、馬鹿馬鹿しい。

「はあっ、はあっ！！」

息が荒くなる。

魔力は底を尽きかけている。

体力は限界に達しかけている。

だが、心は健在、心は折れない。

何者にも負けぬ輝きを放つ不屈の心、

何者にも染まらぬ強靱な精神、

何者にも砕け得ぬ、鋼鉄の魂。

英雄の条件でもあるそれが、今、なのは達をもっとも苦しめている要因の一つ、だったのかもしれない。

「ぐっ……！！」

諦めてしまえば、無機質な心なき敵に対する恐怖心に襲われる事も無かっただろう。

折れてしまえば、ひっきりになしに飛んでくる刃の応酬から逃げる必要も無かっただろう。

屈してしまえば、体を焼く疲労と痛みにも身を震わせる事も無かっただろう。

「っはあああああああああ!!」

だが、諦めない。

しかし、折れない。

それでも、屈しない。

理由などない、ただ、それをするのがもの凄く嫌で、嫌で溜まらないからだ。

クロノが、シャマルが、ザフィーラが、シグナムが、ヴィータが、はやてが、フェイトが、なのはが、全てそう思っていた。

——負けるのは良い、ただ、諦めるのだけは、絶対に嫌だ、と。  
しかし……現実是非常にも、その思いを呑み込もうとしていた。

「きゃあああっ!?!」

なのはが接近を許してしまった斧を装備した鎧の一撃で吹き飛び、  
ビルの上へ叩き付けられる。

それを追い打つかのように、鎧の大群が土煙の上がるビルの上へ群がる。

「なのは!!」

親友の危機に蒼白となったソニックフォームのフェイトがなのはを助けようと急ぐ、だがその目の前に鎧達が現れ、道を阻んだ。

「ッ——どけええええええッ!!」

フェイトはバルディッシュをザンバーモードに変形させ、鎧達を薙ぎ払う。

しかしその背を突撃槍を持つ鎧が狙っていた。

「フェイトちゃん!!」

はやての叫び声に気が付いた時、フェイトはようやくその敵の存在に気付く。

「え!？」

だが隙だらけのフェイトは避けられないと悟り、防御に集中しようとする。

しかし研ぎ澄まされた槍の刃を受け切れるほど、ソニックフォームに防御力はない。

どれだけ魔力を防御に回したところで、致命的なダメージを受けるのには違いなかった。

(駄目だっ……!)

フェイトは絶望し、身構え、目をつむる。

身を貫かれる痛みが、フェイトの体を襲う……ことは、なかった。

「え……?」

暖かい、誰かに抱かれている。

フェイトはゆっくりと目を開ける。

「大丈夫ですか、テストロッサさん」

「い……イズル先生……!!」

そこには、銀の剣を持つ男にして、フェイトの師、キリカ・イズル

がいた。

フェイトは呆然とするが、キリカの腕に抱えられている現状を理解すると、ボン！と顔を真っ赤に染め上げた。

「あ、えと、そのっ……」

「ふふ、その分だと無事なようですね。流石はテストロッサさんだ」

「は……はい……。っ！　なのは………！！　イズル先生、なのはが………！！」

キリカの腕から離れるフェイトは、なのはの事を思い出し、すぐに血相を変えた。

そんな様子のフェイトに対して、キリカはなだめるかのように笑顔を浮かべる。

「高町さんなら大丈夫ですよ、“彼等”が来ています」

「彼等………？　きゃ！」

ドツツゴオオオオオオオン！！

フェイトは突如鳴り響いたその轟音に、思わず悲鳴を上げた。

赤黒い血のような閃光が、一瞬鳴海の街を染め上げ、なのはへ群がっていた鎧達は跡形も無く消し飛ぶ。

そして降臨する、ガーディアン 懺血の守護神が！

その守護神に従者のように付きなのはを腕に抱く、アサシン 閃光の殺し手が！

「良く頑張った、なのはちゃん。」

「こっからは俺が……俺達がやってやる」

目に見えて憤怒の相を浮かべる大地は、なのはを片腕に抱いて、黒白の魔力のオーラを纏い、同じく怒りの気を放つ綜夜は赤黒いオーラを纏っていた。

「綜夜さん、大地さん……その力は……」

「まあ、いつかは話そうと思ってたんだがな。今回は後、W兄貴分に任せて妹分はそこで休んでな!」

「そうそう。任せてくれ。」

雰囲気完全に別人と化した二人に、なのはは不安げな表情をする。だが、綜夜がニツと不敵ないつもの笑みを、大地は優しく包み込むような笑みを浮かべると、なのははほっとしたような表情に変わった。

変わっていない、目の前の剣士と戦士は、紅月綜夜と櫻木大地という、自分の……大切な友人だと、気づいたのだ。

なのははレイジングハートを構えなおした。

「おいおい、休んでろって言ったろ?」

「まだ、頑張れるよ……!」

なのはは微笑んでみせる、だがその頭を綜夜と大地はコッソ、と叩いた。

「あたっ?!」

「休んでろ、無理して頑張られても困るんだよ」  
綜夜は、若干呆れているような表情で言う。

「で、でも……」

「でも、じゃないよ、休んで。全力全開なのは良いけど、それで周りを心配させたら元も子もないよ。なのはちゃんが頑張る分、俺と綜夜が頑張るから」

大地は諭すようになのはに言いながら片腕に抱いていたなのはを立たせる。

「……うん、分かった……気を付けてね……綜夜さん、大地さん」

「任せとけて」

「ああ」

綜夜の説得に、なのはも渋々応じる。

大地は不安そうなのはの頭を撫でると、綜夜に相槌を打つ。

すると、綜夜は足元に魔法陣を展開させた。なのはのいるビルの屋上を覆うように薄い魔力の膜、結界でを張った。

なのははじわじわと自分の魔力や体力が回復していることに気付いた。

「じゃ、行ってくる!」

「行って来ます!」

「あ、うんっ、気を付けてね!」

少々あつけにとられているなのはを尻目に、綜夜と大地は鎧の群れがうごめく空へ飛翔した。

すかさず鎧達が群がってくる。

「エグゼキュート！ドライブ！」

デュアアアアアアア！！！

エグゼキュートから、そして大地の身体から、魔力が奔流のように放たれる！！

その奔流はすべての鎧達に絡みつくように放たれ、鎧達は金縛りにあったかのように動きが止まる。

そこを見逃さず、綜夜は前に出る！！

「ブラドエッジ……ドライブ！」

バシウウウウウウウッ！！

ブラドエッジかの刀身に凄まじい魔力のオーラが纏われ、巨大な刃となったそれが鎧達を跡形もなく消し飛ばして行く。

綜夜の一振りで百を超える鎧達が消えてゆく。

遠方のクロノやはやてたちも、その異常な光景を目の当たりにし、驚愕する。

「な……？！」

当たり前だろう。

なぜなら彼らが知る最大威力、例えるなら、なのはのSLBスターライトブレイカーの威力とほとんど同じ物が、すぐ近くで振り回されているのだ。

（皆！いったんあのビルに避難するんだ！）

そして聞こえてくる、綜夜の念話。

（あ、紅月、アレは君なのか？！）

クロノが驚愕の声を上げる。

（いや、俺と大地だ！本局様とやらの増員も来てるぜ！  
それより早くビル結界の中に入ってくれ、あそこなら大丈夫だ！）

（だがここの敵はどうする？！まさか君達二人で片づけるなんて――！）

そんな冗談は言わないだろうな――！

そうクロノが言いかけた時、クロノの視界が一瞬赤・白・黒が入り乱れる斑模様のように染まった。

そして大気が震える轟音と共に、次々と爆散していく鎧達。

「冗談だろう……？！」

クロノは思わず角が引きつる口で声にしまった。

次々に、あんなに空を覆っていた鎧達が消え去って行くのだ。

しかも自分たちに影響はない、はやてもヴォルケンリッターも無事だ。

一体どういう魔法を使っているのか、あの冴えない剣士と男だと思っていた二人のどこにそんな力が眠っていたというのか、クロノは眉間にしわを寄せることしかできなかった。

そんなクロノの目の前に、いつものへらへらした顔で髪と目を赤く染めた綜夜とやれやれと言わんばかりの苦笑気味の顔の白髪に黒眼の大地が現れた。

「いよう」

「悪い冗談で悪かったな、クロノ執務官様？」

「ツ……まったく本当だ、君達と言いなのはと言い……この世界



出身の魔導師はどうしてこうも僕を驚かせるんだ……？」

「ははは、褒め言葉かそりゃ？」

「そう受け取っておいてくれ、君の指示に従う、なのは達もそこにいるようだからな」

「では…現状を纏めましょう」

キリカが結界の中で声を上げた。

皆それに頷く、キリカは柔和な笑みを浮かべて、魔力のディスプレイを展開する。

今、綜夜達がいるビルの屋上はJ-19地区、犯人がいるJ-24地区にかなり近い場所だ。

しかし結界の外には多数の鎧達がいる。

綜夜と大地がクロノの言うところの「悪い冗談」で掃討して十分と経たない内に、また湧いてきてしまった。

しかし綜夜と大地の張った二重結界には侵入する事ができず、鎧達はその周囲をびゅんびゅんと飛び回っているだけだった。

どうやら敵は無尽蔵、となれば一気に犯人を捕まえるのが得策だろうが、しかし敵の本陣に突っ込んだとしても、鎧達に身動きを止められてしまう可能性は大きい、その上罠がある可能性もないわけではない。

そしてここに留まって鎧達の足止めをする部隊と、敵本陣に殴り込みに行く部隊、それら二手に分かれることとなった。  
しばらくの話し合いの末。

殴り込み部隊は大地、綜夜、キリカ、クロノの超が付く少数精鋭。  
足止め部隊はなのはをはじめとしたそれ以外のメンバーで構成される事になった。  
足止め部隊には、間もなくしてキリカの部下たちが加勢に来ると言う。

「待ってろよ、風下……！」

綜夜はブラドエッジを握る手を強める。

J-24のとあるマンション、そこに住むクラスメート、風下茜を救う決意を固めるように――。

そして

「じゃあ、行くぞ！」

綜夜達がそういつてJ-24地区へ飛び立った後、なのは達もまた敵の鎧達を足止めするために、結界の外へ飛び出した。

すぐに大量の鎧が各々の視界を埋め尽くすが、すぐさますべて綜夜の発した赤黒の衝撃派によって微塵に吹き飛ぶ。

しかし直後に次の鎧達が現れ始める、が流石にさきほどよりは数は少ない。

「私達も行こう……！」

なのははレイジングハートを構えながら言う、綜夜達の姿はもう見えない。

ここからは首謀者が捕まるまでの無制限サバイバルだ。

現状の戦力は、なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラの計七人、アルフはリンディとエイミィを守るために結界が張られたテストロッサ家にいる。

ここにいる皆が皆相当の実力者だが、圧倒的な物量の前だとやや不安になる戦力ではあった。

波のように鎧達が迫る、なのははレイジングハートを握りしめる手を強めた。

そして戦いが始まる、と思われたその直前。

「グレイヴ・ディザスター」

「とるねーど・ばん」

——カッ!!

暗雲の空を駆ける火炎を纏った蒼穹と翡翠の閃光。

その閃光は鎧達の波を貫き、決壊させる。

「?!」

なのは達が驚いて振り向く。

そこにはバズーカと大剣を組み合わせたような外見の武器を握る黒いショートヘア、そして茶色の狼のような鋭い眼光を宿した瞳を持った青年と、両端に細かな装飾が彫られた棒を肩に担ぐ、ニット帽を目深に被った金色の瞳の青年がいた。

「——時空管理局空挺派遣調査部隊『ハウンドイーグル』部隊員、  
“南雲<sup>なぐも</sup>海<sup>かい</sup>”。」

「同じく『ハウンドイーグル』部隊員、アレス・コルキッシュ。」

「「現場に到着、キリカ“クソ”隊長のありがた〜い直令にしたがい……お前らを援護してやる（のです）」」

「は……?」

呆気にとられるのは、他の皆も同様だ。

そして気づく海とアレスと名乗った青年達の後ろで、鎧が剣を振り上げているのを。

しかし全員が警告の声を上げるより早く、その鎧は何者かに頭を打ち抜かれ、炎上、落下した。

『海、アレス、危なかったわね。でもこれで二人に貸し一よ』

そして海の持つデバイスから、女性の声が響いた。

しかしAIの声ではない、どうやら遠くからの通信らしい。

海は面倒臭そうに頭をボリボリ搔くと、バツが悪そうにその声に答えた。

「なんだあ? 後で温泉にでも連れて行ってか?」

『ふふ、考えておくわ。』

「海さんが率先して温泉と言う事はかの有名な『覗き』をするのですね」

「んなわけあるか。ボケアルス」

「なんですかあ? 反論するってことは凶星でしたか?」

「おいおいおい……良い度胸だな、お前アレか? いっぺん殺<sup>や</sup>られてえのか?」

『もう、二人とも！……ごめんなさいね。私の名前は“セリア・ヒューミリアス”。こいつやキリカ隊長と同じ時空管理局空挺派遣調査部隊『ハウンドイーグル』の部隊員よ。今からあなたたちを援護するわ』

「あ、はい、お願いします」

なんだかわけが分からない、といった様子で頭を下げるのは。

「つーわけだ。ま、敵さんがいっぱい来たみたいだから、おしゃべりはここまでだな、言いたいことがあったらこの後キリカのクソ野郎に言っとけ、俺は知らん」

「僕等の中でリーダー格の貴方が責任放棄ですか？」

「うるせえ、来るぞ」

「はいはい」

海は握っている愛用のデバイス、“ノートウング”を大剣に変形させ、アレスは愛用デバイス“アガシオン”の先端を鎧達に向けながら言う。

そして、なのは達の戦いが始まった――。

## 発現・新たなる災禍

なのは達の戦いが始まる一方で、綜夜達は鎧達を蹴散らしながら進んでいた。

「それにしても、驚いたな……君達二人は一体何者なんだ……」

綜夜と大地の戦闘能力に、クロノが驚いたように声を上げた。

ここまでの敵はほとんど、というか全て綜夜と大地が絶妙なコンビネーションで蹴散らしている。

百は下らないかと思われる軍団を一撃で消し飛ばしたりと、クロノはまるでこの世の物とは思えないような物を見る気分だった。

「まあ、これが終わったらゆっくり話すさ……」

「そう……これが終わったらな……」

綜夜と大地は浮かない顔でそれに応えた。

そういうのも、ついに目的地であるマンシヨンに到着したからだ。

異常な光景が広がっていた。

マンシヨンの屋上に、まるで城塞のような建設物が出現していたのだ。

その城塞には幾つかの砲門と、バリスタのような物が取り付けられて、巨大な門は硬く閉ざされている。

要塞は来る者全てを拒む、冷たき翡翠色の城塞。

その砲門は間もなく来訪者である綜夜達に向かって火を噴いた！

「ッ！！」

そこから発射された極大の魔力レーザーを、四人は散開して回避する。  
そのばらけた四人を今度はバリスタから発射された、魔力の矢が狙う。

幸いにして狙いは単調、しかし不幸にして発射されるその矢の数は、まさに“弾幕”と言って差し支えないほどの物だ。

「突破する！」

クロノが矢の弾幕と、間隔を空けて発射する砲撃の合間を縫いながら、門にスティングァーブレイドを撃ち込む！  
爆発が起こるが、門は無傷！

「予想はしていたが……やはり硬いな……！」

クロノが苦渋に満ちた表情で呟く。

「ここは私に任せてください！」

そんなクロノの隣を突っ切って、キリカが悠然と城塞へ突貫して行く！

矢と砲撃の嵐を華麗に避けながら、キリカは猛進する！

そして城塞の門へと肉薄したキリカは、己の剣、シルバーに青い魔力を込めた！

銀の聖剣が深蒼の輝きを受けて、妖艶に煌めき、光の一閃が走る……！

「貫くは銀の閃光！　アージェント……ステイカー……！」

——ガオオオオオオオオオオオオ……！

『アージェント・ステイカー』——魔力と対象の魔法プログラムに干渉、破壊するその放たれた銀の聖剣での突きが、門を打ち貫く！強固に閉じられた城門は跡形も無く消し飛び、その衝撃で城塞は悲鳴を上げるかのように轟音を響かせた！

「ここは私が引き受けます！三人は一刻も早く犯人の確保を！」

キリカが振り向いて叫ぶ、その視線の先には鎧達の大群が迫っていた。

「大丈夫なんだろうな?!」

綜夜が疑問を投げかけると、キリカはフツと口端を上げて頷く。

「危なくなったら逃げますよ、ご安心を！」

「上等！行くぜクロノ！大地！」

「了解！」

「っ、ああ！」

そしてクロノと綜夜は城塞の中へと侵入していった。

その背中をキリカは見送ると、敵の大群へと振り向く。

キリカはニタリと口端を上げ、指を鳴らす。

砲台とバリスタが、再び火を噴いた。

——懺血の守護神、及び閃光の殺し手が結界内部へ侵入。懺血の牙、閃光の短剣の動作良好。“イクサリオン”との接触まで間もなく。



イクサリオン、アクティブモードへと移行、同時にメモリーの改竄を続行。

——イレギュラー一名を確認。データ照合、空挺部隊アースラ所属、クロノ・ハオラウンと確定。処理は“兇刃”に任せる。

——プロジェクトGOA、第二ステップへ間もなく進行します——

広き城塞の謁見の間の玉座に座す純白の鎧騎士は、自らの剣を携え静かに佇んでいた——。

その記憶<sup>メモリー</sup>を駆け巡るのは、忌まわしき記憶。

守るべき人を、主を、守れなかったという騎士として恥ずべき記憶。鎧騎士は人では無かった、彼は主を守るために創造された人形の騎士なのだ。

しかしその白鉄と魔導に包まれた体ではあっても、肉を持たずとも、人で非ずとも、鎧騎士には気高き高潔な騎士としての魂が宿っていた。

ゆえに、あの記憶が騎士の高潔な魂に軋みをもたらす。

人であったなら、幾度となく身を震わせて嘆き悲しんだだろう。

しかしそれはできない、だが、それでいい。

今は守るだけ、新しき主を、この身全てをかけて。

守れなかった主を迫害し、殺した、あの忌まわしき“血の色をした災厄の剣士”とそれに従う“黒と白の衣を纏う暗殺者”から、そして、全ての魔導師から——。

「お前が、この事件の犯人か？」

来た——それも、ヤツが、血色の災厄が！黒白の災禍が！

来訪者の登場にガチャリ、と重い音を立てながら、純白の鎧騎士は玉座から立つ。

その手に握られるは騎士王の剣、白熱せし太陽の刃を持つ両刃の剣

“エクスカリバー”。

災厄を迎え撃つために、騎士王は立つ、新たな主を守るために。

その記憶が、偽られた物だとも知らずに——。

「イクサリオン！？」

クロノが驚きの声を上げる、綜夜と大地もまた意外そうな表情をしていた。

「クロノ君、知ってるのか？」

「あれは本局の執務官達が血眼になって探しているロストログアだ……数週間前に封印されていたのが急に起動して、異世界へ逃亡してしまったんだ、まさかこんな所にあるなんて……！」

「俺としては、現存してたのが驚きだな、先の大戦で全て破壊されたもんだとばかり思ってたが……っと、来るみたいだぜ、気を付けろよ！」

イクサリオンがエクスカリバーを振るう！

そこから発せられるのは白き閃光の斬撃！！

綜夜へと真っ直ぐに向かうそれを、綜夜はブレードエッジで薙ぎ払った！

「ぐっ?!」

クロノがあまりの衝撃に、後方へ吹き飛ぶ。

素早く受け身を取って顔を上げると、クロノはそこにはもはや自分が入り込める世界が無い事を知る。

若草色を纏った白の刃と、血塗られた赤黒の刃が互いにぶつかり合う。

その度に凄まじい衝撃音と大気の振動が巻き起こり、クロノを戦慄させる。

「は、ははっ……僕は神話の世界にでも来たのか……!?!」

「そだな」

思わず笑うクロノと平然としている大地。

ぶつかり合う刃の威力は、Sランクは下らぬほどのものだ。

時空震が起こらないのが不思議なほどに研ぎ澄まされたそのパワーは、自分が、ニンゲンが辿りつける域を、はるかに超越してしまっている。

ファンタジー

まさに御伽草子、子どもが描いたような荒唐無稽な活劇、それを間近で見せられているクロノの心は、驚きも呆れも通り越して、冷静さを彼に与えていた。

「紅月! そいつが動いているという事は、この近くにそいつの所有者がいるという事だ! 僕は所有者を探してくる! 大地、紅月の支援を!!」

「了解!!」

「そいつは君達に任せるぞ!!」

「「ああ、任されたッ!」」

綜夜と大地が大きく頷く、それを確認したクロノは謁見の間の奥へ

と向かって行く。

イクサリオンがクロノを足止めしようと、衝撃波を放つが、大地が壁となりそれを防ぐ。

「残念だが、ダンスはまだ」

「終わっちゃいないぜ！」

綜夜がブレードエッジで、大地がエグゼキュートで切りかかる、イクサリオンがエクスカリバーでそれに応じる。

鎧の奥に光る赤い瞳には、高貴なる魂の怒りと憎しみが沸き立っていた。

エクスカリバーが光を放ち、綜夜と大地を吹き飛ばす。

クルクルと空中で回転し、姿勢を立て直した綜夜に、イクサリオンは追撃をかけた。

懺血の刃、閃光の刃と白陽の刃が火炎を散らす。

「大地！コイツの剣……！」

「ああ…憎しみと怒り、悲しみが伝わってくる……！！」

剣士とは、己が刃に魂を込めて振るうものである。

戦士とは、敵に敬意を持って対峙する。

どれだけ未発達な剣士の刃でも刃には魂が籠るものなのだ。どれだけ未熟な戦士でも、自然と敵に敬意を持つものなのだ。

そして相手の刃に込められた魂は、相手の瞳に秘めた意思は、達人であれば達人であるほど鮮明に理解することができるようになる。

上等の剣士同士ならば刃を交わすことが、そのまま言葉を交わすよりも詳しい魂の交流をすることができるのだ。

綜夜はイクサリオンが振るう刃から、純粹な憎しみを感じ取った。

大地はイクサリオンの輝く瞳から、純粹な殺意を感じ取った。  
そして、その憎しみが、殺意が、全て自分に向けられているものだというところも。

綜夜と大地は頭をフル回転させながら、イクサリオンに関する記憶を思い出す<sup>けんさく</sup>。

しかし、思い当たる節がない。

イクサリオンという魔導兵器とは、確かに戦った者がいる。

大戦の最中に現れた災を狩る最中に、当時量産されていたイクサリオンを何体も倒した。

だが、どれもこの魔導兵器に恨みの感情を抱かれるような、そんな事はしていないはずだ。

それに違和感がある。

古代ベルカの技術、それは確かに今見ても目を見張るものだ。

だがしかし、このイクサリオンの個体は、それにしても強すぎる。

持っている剣もそうだ、こんな強い力を持った“宝具”のような剣を、当時のイクサリオンは持っていなかった。

（（特別にカスタムされた機体なのか……？））

綜夜はブラドエッジを振りながら、大地はエグゼキュートで剣戟を防ぎながら思考する。

剣を通して伝わる憎しみは、瞳を通して伝わる殺意は、エクスカリバーに宿る破壊の光をさらに増幅させているようであった。

「まあ、なんだって良いさ！ お前を足止めして、クロノ君を待つだけだ！ 行くぞ大地！」

「ああ、やってやる！！！」

その頃クロノは、ひたすらに長い回廊を移動していた。  
空間が圧縮されているのか、凄まじく長い距離を飛行している。

「反応はこの先……待っているよ！」

サーチによって生体反応があった場所へ、クロノは飛行していた。  
不自然な事と言えば、反応が一步たりとも動いていないことと、追  
っ手も何も来ないことだろうか。

何かの罠だろうが、今進むことに支障がないのならば、好都合だ、  
とクロノは考える。

今は時間が惜しい。

早くしなければ、フェイト達の安否が危ぶまれるからだ。

クロノは加速する。

ひたすらに暗かった回廊に、光が差し込んできた、そして反応も近  
くなる。

光と反応の元へクロノが辿り着いた時、そこにいた人物に、クロノ  
は焦った声をかけられた。

「すみません、そのアナタ！　ここから出してくれませんか！？  
友達を……白<sup>はく</sup>を止めないと！！！」

そこにいたのは、綜夜と大地の良く知る人物だった――。

「<sup>ヌストイカ</sup>果実酒！」

「はああ！！！」

綜夜は剣戟によってイクサリオンを吹き飛ばし大地はそこに黒白に輝く螺旋の魔力弾を放つ。

そしてすぐさまイクサリオンを踏みつけて、そのコアがあるはずのプレートメイルにブラドエッジを突きつけた。

「お前の負けだ」

「大人しくお縄に頂戴されろい」

綜夜と大地は溜息をつく。

イクサリオンはなんとかして動こうとするが、両手足に二重にバインドをかけられてピクリとも動けなかった。

「白!!」

綜夜と大地の耳に聞き覚えのある声が響いた。

二人は驚いて振り返る、そこには茜がいた。

「風下っ、だいじょうぶ」「ひゃあ! 紅月と櫻木さんが不良になってやがります! ? ああ、今はそんな事はともかく! 白、大丈夫ですか?!」

何か言いかけた綜夜を押しつけて、茜はイクサリオンの元でしゃがんだ。

「ああ、自慢の真っ白ボディが……後で拭かないと!」

「「……どゆこと?」」

さきほどまでの緊張が一気にほぐれてしまった。

綜夜と大地は肩透かしを食らったような気分で、目をパチクリさせる。

「その子が、イクサリオンの、マスターだ……はあ……疲れた……」

「おお、クロノ君、大丈夫か!？」

クロノが息を荒げながら現れる。

驚く綜夜だったが、すぐに気を取り直して茜の方へ向いた。

「風下あ、説明してくれ……状況が分からなさすぎる」

「あ、ああ、はい、スミマセン……あ、白、あなたはお座りしてなさい!」

茜が綜夜達の方へ振り向く。

バインドから解除されたイクサリオンのエクスカリバーを振り上げるが、茜の一声ですぐに大人しくなり、正座して項垂れた。

「ええつと……どこからお話ししましょうか……」。

一か月前、私の家に白が、イクサリオンがやってきました。

突然光の輪に包まれて現れた白は、その時見た私を所有者として認定したらしくて……それから、白との生活が始まったんです。

白は良い子ですよ、気も利きますし、家事も上手なんです。

ですけど数週間前から、いきなり家の中に結界を張るようになって……私は、それに気付いた時には、あの鎧達を発生させていたんです。

私が止めるように言っても、なぜかやめてくれなくて……今は、良



いんですけど……。

それで、昨日から私は光のケージに閉じ込められて、ハオラウンさんが来るまで、閉じ込められていたんです……だীব端折ってますけど、ハオラウンさんには詳しく話しました」

「ううん……」

クロノが首をひねる。

「ほ、本当ですよ！　嘘はついてません！」

「そうだぜクロノ、少なくとも風下は嘘をつくような奴じゃない」

「ああ……疑っているわけではないんだ。外の鎧達も消えたと、フエイト達から連絡が入ったし……ただ気になるんだ」

「何が？」

大地と綜夜はユニゾンでたずねる。

「イクサリオンは、とても忠実なデバイスだったと文献や資料に残っている。それに本局の技術でも干渉できない複雑なプログラムの元で動いているらしい。」

それが、マスターの命令を無視して動くことがあるのか、と思って、な」

「確かにな……ま、今は茜の言う事を聞いてるみたいだし、いざとなったら俺が止めるさ」

綜夜が不敵な笑みを浮かべる。が、大地が訂正をかける。

「“俺達が” だろ？」

「っ、そうだな。」

「そうしてくれると助かるよ、どうにも僕には手に負えなさそうだからな。」

とりあえず、君とイクサリオンは一時的に管理局……といっても僕の家だが、でまた話を詳しく聞かせてもらおう」

「はい、事情調査つてやつですね！」

「前科持ちになるかもな」

「それに事情聴取だ」

「や、やめてください！嫌ですよ！って櫻木さん、訂正しないでください！」

ケラケラと笑う綜夜と、くすくすと笑う大地に、茜は焦った様子でわたわたと首を横に振る。

「紅月、櫻木、君達もだぞ。その力について教えてもらわないといけない、話によっては君も前科持ちになるかもな？」

「げ、マジか」

「うわぁ…」

「はは、冗談さ。三人とも事件の解決には協力してくれたし、イクサリオンをなんとかすれば、万事解決だ。そうお咎めもないだろう」

「白と、お別れしなくちゃいけないんですか……？」

茜が少し暗い顔になって、イクサリオンを見る。  
イクサリオンもまた、茜を見た。

「すまない、それは……………」

——僕の口からはまだ何も言えない、そうクロノが言おうとした時だった。

「処刑、さ、今ここで……………ね!」

「ッ!!クロノ!逃げろ!!」

「は——?」

グチャ——。

水音と切り裂かれる音が、広い謁見の間に響いた。

「な…………!?!なぜ、あなた、が…………こん、な…………?!」

クロノが、自分の腹から咲いた真っ赤な花、自分の血を浴びて真っ赤に染まった銀の刃を見ながら言う。  
背後から、刺されたのだ、誰に？

「キリカッ！！てめえええええ！！」

綜夜が叫び大地は怒りに顔を歪める。

そう、クロノを刺したのは、他でもない、キリカ・イズルだったのだ――！

キリカの表情は口が避けんばかりに笑いを浮かべ、狂気と殺気を周囲にふりまいていた。

クロノの腹から銀剣、シルバーが抜かれ、クロノは力なく倒れる。

「あ……あ……」

怯えきってへなへなと膝を折る。

そしてイクサリオンと大地が茜を庇うかのように、茜の前に躍り出た。

「フッフ……クロノ執務官、君は“栄誉の殉職”さ」

「何、だど?!」

「デメエ何を言って……!!」

倒れたクロノに、キリカは甘く、狂気をはらんだ実に楽しげな声で話しかける。

綜夜と大地が怒りに満ちた声で叫んだ。

「クロノ・ハオラウンは、ロストロギア、イクサリオンを奪った

事件の首謀者、紅月綜夜、及び共犯者、櫻木大地に後ろから刺されて殉職”」

綜夜と大地は言葉を失う。

得体のしれない、底知れぬ狂気のおいがキリカからあふれ出ていたのだ。

「そしてその場に居合わせた現地人の少女、風下茜を惨殺する”」

そしてキリカは言葉が続ける、まるで物語を紡いでいるかのように。物語、自分にとって都合のいい、最高にして最悪のストーリー。

綜夜と大地は背筋が凍るのを感じた。

「そして、両名はキリカ・イズルによって討伐される”……ああ……良い話だ、明日のトップニュースになるだろうね……じゃあ、死んでくれ」

そして、銀剣の切っ先を茜に向け、凄まじい速度で切りかかった！綜夜がブラドエッジでその兇刃を受け止める！

「意味が分かんねえぞ！ お前！！」

「ははは！ 犠牲だよ！ 私が“英雄”<sup>ヒーロー</sup>になるためのね！！」

「はあ？！」

ガキーン！と凄まじい音を立てて、二人は距離を離れた。

「私は、キリカ・イズルは英雄になるために生まれてきた……！英雄になるには、多くの功績を得なければいけない……そのための犠牲

なのさ、君たちは!」

「つまり、お前の名誉のために、死ねたのか?!」

「そんな名誉のためにクロノを?!」

「その通り!　だが彼も本望だろう!　私が英雄になるための糧と  
なつて死んだのだから!」

キリカは笑いながら言った。

もはやその表情に、前までの優しい物は一つもない。

あるのは狂気だけ、純粹な狂気と狂喜だ。

キリカが笑いながら凄まじい威力の斬撃波を、でたらめに飛ばす!

それは謁見の間の壁を、床を崩し、全てを無造作に破壊して行く!!

その光景はまさにこの世の地獄だった、本性を現したキリカは地獄  
を作り出す“災”そのものだったのだ!

「クソ!!」

綜夜と大地が二重障壁を張ってそれを防ぐ、だが予想以上の威力に、  
余波が後ろにいたイクサリオンと茜を襲った!

「きゃあああ!!」

茜が悲鳴を上げる、イクサリオンが茜を抱きかかえるようにして庇  
った!

そしてイクサリオンと茜の体を、光が包んでいく!

「転移する気か?!」

キリカが怒りを露わにし、一際大きな斬撃波を飛ばす!

「「やらせるかあああああああ！！」」

綜夜と大地が渾身の一撃で、その斬撃波を食い止める！  
凄まじい爆発が巻き起こり、土煙が上がった！！

「……クソ、クソ、クソ……！！ 逃げたかッ！！ 逃げたかッ！！」

土煙を吹き払ったキリカは、こつ然と姿を消した綜夜達に気付くと、怒り狂って残された城塞結界を、シルバーの一閃で破壊した。そして、クロノを見つける。

キリカは近づいて確認する、まだクロノは息があった。

（チ……急所を外したか……いや待てよ……）

キリカはにたりと口端を邪悪に曲げると、クロノをまるで介抱するかのように抱きかかえた。

なぜなら、その背後には、顔面蒼白となったフェイトがいたのだ。そしてキリカは“とても悔しそうな顔”をして、“涙を流しながら”振り返る。

その表情と、抱きかかえられるクロノを見て、フェイトが手に持ったバルディッシュを落とした。

「フェイトさん…… “僕はあなたの大切な人を守れなかった”……」

——災は、その炎をゆつくりと広げていく——。

クロノの手に、くしゃくしゃになった紙があるとも知らずに……

——懺血の守護神がイクサリオンと転移。計画に齟齬発生、プランA—7失敗。プランD—8へ移行し、プロジェクトGOAを再開。そしてとある次元世界では

「……………」

「キースう、どうしたのお？」

「……………いや…行くぞ…食事の時間だ……………」

新たな闇が胎動していた……





「どうか哀れな迷い仔に――優しき断罪を――！」

そして彼は…長き戦いの果てに、彼女を止めた…その命を、魂を、自らの短剣に纏わせ…喰わせ…止めた。

魔神の残骸は砂と化し、ノーザの亡骸は、その任を果たし、その力から拒絶された為に力の源を遺し…光の粒となり消え去っていった

神よ…オレは親愛なる仲間を救えなかった、守れなかった。

神よ、何故にあなた方と同じ神の名を冠する者を見捨てた。

何故…何故貴方はオレから家族を…愛する者を…戦友を奪う。

アイツは愛する者に、その思いを伝えてなかったのに。

何故に…何故に、アイツは…これ程にまで世界に奉じたのに。

「……オレは…仲間と…あの者ノーザと共に災いを狩り、アイツの背を後押しすることを望んだのに…神よ…貴方に慈悲は無いのか…」

……世界は…我等を見捨てたのか…？

そして…アキラの前にノーザの身体から遺された赤黒く輝く牙と彼の掌に握られた黒白に輝く短剣が現れる。

「…任は…もう終わりか……………ノーザや…オレのような末路を辿らせないよう…戒めの記憶を…戒めを破った者達の末路を…後の世の者にも……………伝えてくれ…」

牙と刃は応えるように、それぞれの輝きを放つ。

「さあて…お前達が去るなら……………オレはいろんな時空世界を旅しようか……………また、何時の日か…<sup>まみ</sup>見える時まで…」

サヨウナラ…我が友よ…我が力よ…

その言葉を言い切ったときには、そこには幾百…幾千の死者を一人一人埋めた墓以外…何一つ遺っていなかった……

**思案・それぞれの思惑と闘い（前書き）**

男は弄し、企てる。我が願いのために

男は願い、走る。家族と出会いたいがために

男は思い、涙する。愛する者達のために

男は彷徨い、流れ行く。友とはぐれたために

## 思案・それぞれの思惑と闘い

——ハウンドイーグル所属L型時空航行艦“ストウームレイド” 医務室——

クロノは昏睡状態にあった。

医師は内臓に激しい損傷を受け、その上で何か“呪い”のような物を埋め込まれたのではないか、と言っていた。

フェイトは最近、クロノの眠るベットの隣で、いつ目が覚めるか分からない兄の覚醒を待ち続けていた。

だが、クロノは目を覚ましてはくれない、微笑んでくれない。フェイトの心は、小さな軋みと悲鳴を上げていた。

(どうして……綜夜……大地……)

櫻木大地と紅月綜夜——この事件の真犯人にしてクロノを傷つけた張本人。

二人の友人の裏切りと家族の半喪失。

この出来事は、フェイトの心に眠っている小さな小さな傷跡をゆっくりと広げて行く。

実母、プレシア・テストロッサが遺したその傷が、今になって血を流し始めたのだ。

——そして、その傷跡を埋めようと、災が花束を持って現れる。

「フェイトさん、ここにいましたか」

「イズル、先生……」

ニコリと“悲しい”微笑みを浮かべながらキリカが現れる。

「フェイトさん、みなさんが心配していますよ……“私も”です」

「……」

「……認めたくないのは、分かります。“私も彼等が犯人だとは、認めたくありません”」

「先生……」

「ですが、目を逸らしてはいけません、執務官たるもの、“真実”を見極めるために、行動しなければいけないのです」

キリカは、そっとフェイトの手を取る。

フェイトの顔が、僅かに朱に染まった。

「共に行きましょうフェイトさん。“真実を見極め”今闘うべきものは、何者なのかを」

そしてキリカは、フェイトの耳元でそうささやいた。

フェイトは、少しだけ涙を浮かべたが、きっと前を向いて真っ直ぐに答える。「はい……!」

「“ありがとう”、フェイトさん」

ニコリとキリカが微笑む。

握られた手から、フェイトは『自分の中に何かが芽生えるのを』感じた。

同艦内の、とある一室ではアレスがロケットの中の写真を見つめていた。

写真には一人の青年と少女と女性が写っている。

青年はニット帽を外したアレス。

女性は金色の長い髪をおろしてアレスを垂れ目にしたような女性。

もう一人は先の跳ねた赤茶のショートヘアでボーイッシュな少女。

三人とも笑顔で写っている……そう“常に無表情なアレス”でさえ“笑顔で写っている”のだ……

「……姉さん……ミア……」

アレスはそのロケットの蓋を閉じ、呟きながら頭を垂らしていた……  
……頬に何かを伝わせながら……

そしてとある次元世界のとある森の中では

「……迷ったな、完全に」

大地は彷徨っていた

ただ彷徨うのならまだ良いのだが……

「こっちに着いたとたんウンともスンとも言わなくなっちゃったし

……魔力を追うにも追えない……最悪な状況だOrz」

こんな状況から早一時間。そろそろ腹も空きはじめる。

「とりあえず道があれば良いんだがなあ……」

一先ずは歩き続けることにした大地であった。

同、次元世界……山の麓では

「まったく……少しは休ませてくれよ……」

一人の男が巨木の枝で地面を見ていた。

辺りに動物はいない、その“男”から感じ取れる無機質な生命エネルギーと、別の何かから出ている純粋な狂気を感じ取ったのだろう。さらに言えば男の両手にはハンドガンを持っている。

余計に動物達は本能的危機感により、逃げたのだ。

辺りの木々は斬られ、割かれ、砕かれ、ただならぬ惨状である。

「……」

男は地面を見ているとそこに一人の少女が現れた。

髪は緑色のかかなりの長髪だろう、男が様子を見てみると、少女がいきなり上を見てきた。

男はハッと身を隠しながら少女を見る。が、そこに少女の姿は無かった。



刹那

「見つけた♪」

少女はラングの隠れている木の枝に乗っていたのだ！

「っ！くっそ！！」

男は横へ倒れこむように回避しながら枝から降りる！着地した瞬間、  
駆け出す！

「あ、待ってってばあ！」

少女は飛び降りながら男を追う！

（まったく、妙な世界に來たと思ったらこれかよ！！！  
トラブル）

男はそう思いながら、走り続ける。

男……ラングはとにかく全力で走り続けている。

ラングと大地が会おうまで、あと1時間

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5416x/>

---

魔法少女リリカルなのは†閃光の殺し手†

2011年11月15日09時07分発行